

源氏物語爪印

— 濡標・蓬生・関屋・絵合・松風 —

村 井 利 彦

濡 標 卷

て光源氏に敵意をもやしている。二代にわたる確執。ついに自分の代で止めをさせず、生き返らせてしまった無念がにじんでいる。しかし、もはや彼女の時代ではない。

【1】十月に桐壺院追善のための御八講を行う。「かの沈みたまふらむ罪救ひたてまつることをせむ」。光源氏の帰還が、桐壺院の靈力であってみれば、光源氏のこの行為は当然の帰結であろう。源氏物語の構想に即していえば、これは、賢木巻にある藤壺による法華八講と対になる構想であろう。明石巻末の予告どおり、藤壺と同じレベルの政治人間に成長した光源氏の風姿がここに認められる。(明石巻)。藤壺の法華八講から四年の月日が経っている。光源氏復活の政治シヨ一の要素が顕著である。

「世の人なびきつかうまつること、昔のやうなり」。この政治シヨ一は絵合巻まで続く。

【2】朱雀帝の思い。桐壺院の遺言を守ることが、「ものの報い」から逃れること。目も回復している。一方、大后は、依然とし

【3】光源氏、および朱雀帝の、桐壺院に対する思いは、仏教的にいえは、「恩愛」である。この恩愛のテーマも、このあたりから、筋を動かす力として作動しはじめる。政治、男女の愛とともに、無視できない源氏物語の要素の一つである。

【4】健康を回復した朱雀帝であるが、「おほかた世にえ長くあるまじう、心細きことのみ、久しからぬことをおぼしつ」と本文にある通り、健康状態には自信がなく、帝位はもとより、命もそう長くはない感じである。しかし、若菜巻でもそのようなのであるが、この朱雀帝は、死にそうでなかなか死なない。このところが不気味である。平城帝のことを念頭において、作者が書いているのではないかという気がする。皇太子時代から病弱で、怨霊に悩まされた平城帝は、彼の政治的死を意味する葉

子の乱（八一〇年）以後約十五年も生きてゐる。

【5】朱雀帝の退位が近づき、父の大臣も死に、姉の弘徽殿太后も不順であるという状況。臘月夜が「心細げに世を思ひ嘆」いている。彼女に、菓子面の影を見るのは気のせいだろうか。

（4）。

【6】朱雀院と臘月夜との会話は、須磨巻からの連続性のなかで読むべきものであろう。光源氏より愛しているのに、光源氏より愛されていないことを自覚する朱雀院は誠に気の毒な存在である。彼は天皇であつて天皇ではない。が、臘月夜の心境にも、微妙な変化が表れている。「めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりしけしき、心ばへなど、もの思ひ知られたまふ」。大人になつた彼女は過去を反省し、朱雀院の限り無い愛の方に顔を向け始めているのである。「二心ない愛」の発見である。この、光源氏の案外の冷たさの表示は、彼の変質を、女性特有の動物的感覚で捉え、さりげなく示唆したものだと思えておきたい。政治人間へと変貌した光源氏の、さりげない描出。臘月夜も、須磨明石の時間でもって成長しているのである。

【7】「なか御子をだに持たまへるまじき」という朱雀院の臘月夜への思いは、光源氏の紫上に対する思いと連動している。一番愛する女に子供ができない。さても、朱雀帝が、光源氏との間には、すぐにでも子供に恵まれるのではないかと臘月夜に言い「限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし」と言つた点に着目しよう。このなにげない言葉は、次に即位する冷泉帝への額縁をなす言葉である。言い換えれば、光源氏の子である冷

泉新帝は、断じて「ただ人」なのだという宣言であらう。言つた本人はなにも気づいていないけれども、察しのよい読者は気づかないわけにはいかない。この条は、そういう額縁意識を読者のなかに醸成する意味合いのある条なのではないか。しかし、朱雀帝は天皇であつて天皇ではないという発想に立てば、冷泉新帝こそ天皇なのだという論理が成立する。こういう発想を成立させるのも、須磨明石の力なのである。

【8】年が変わり二月になる。運命の皇子・東宮が元服する。十一歳。「ただ源氏の大納言の御顔を二つにうつしたらむやうに見えたまふ」。藤壺の心の痛み。光源氏のアキレス腱。これは、復活を手放しで喜ぶ読者への冷水だろう。このことは一時も忘れるべきではない、と作者は強調しているように見える。光源氏の栄華は、不安の上に築かれた一旦の夢ということ。ここからいつでも崩れる。したがって、今なされようとしている朱雀帝の決断は、とんでもない決断なのである。（7）。

【9】「いとまばゆきまで光りあひたまへる」ということを、世の人が素晴らしいと思うのは当然として、朱雀帝も「めでたしとみたてまつりて」讓位を決断している。ということとは、まばゆきまで光るということが、天皇の条件という見方もできる。異界の人の後裔である天皇の条件として「光る」ことが考慮されていると見ることもできよう。と、すれば、光らない朱雀帝より、光り輝く光源氏その人こそ、正しく帝王なのだという発想も自然なものとなる。そう読むべきではないのか。

【10】藤壺のことを「母宮」と書いている。東宮が光源氏と異

ならないことを、「いみじうかたはらいたきことに、あいなく御心を尽くしたまふ」とある。藤壺は、母として純粹に悩んでいる。彼女には、東宮こそが正当な天皇だという意識はない。光源氏はこの時、藤壺を抜いたのではないか。

【11】「同じ月の」二月二十余日、元服まなしの東宮が十一歳で即位する。完全な幼帝である。「にはかなれば、太后おぼしあわてたり」から判断して、太后は寝耳に水の讓位であったと見える。このあたりの朱雀院の意思は、決然としていて、母の呪縛から独立している。朱雀院が太后に「かひなきさまながらも、心のどかに御覽ぜらるべきことを思ふなり」と言って慰めているところ、慰めになっていないが、恩愛の表示ではある。

【12】東宮には「承香殿の皇子」が就任した。今年三歳。幼帝、幼東宮である。これ以後における、光源氏の圧倒的な専権が予想される。そして、東宮位の不安は、依然として継続する。母が「承香殿」女御ということは、賢木巻で、臘月夜と細殿で密会した光源氏に微妙な視線を送った男・藤少将、後の髭黒の妹ということであり、なおさらに不安要素は大きい。この東宮は光源氏によって仕返しをうける可能性がある。（賢木巻）。しかし、光源氏には、廃太子のための駒がないから、新東宮は、しばらくは安全であるかもしれない。また、明石腹の子が女であれば、将来、二人の結婚が予想される。そうすると、この新東宮は一転して全く安全ということになろう。そうすると、髭黒が弘徽殿方から光源氏方へと転向してくることが予測されると

ころだ。もしこの転向が実行されると、藤原氏にとっては潰滅的とはいえないが、かなりの打撃となろう。

【13】光源氏は、大納言から内大臣に昇進している。内大臣は、令外の官であり、臨時の、無理な人事の感覚が強い。光源氏の性格か。あるいは、国母となった藤壺の意思かもしれない。

【14】冷泉帝の即位にともない、齢六十三歳の、故葵上の父である致仕の左大臣が摂政・太政大臣となる。彼を復活させるには、現在左右大臣がいて、これを排除できぬから、則闕の官である太政大臣とする以外手がないという事情があるのだらう。それにしても、この人事は、新帝との関係からいって異例である。「摂政」なら、ここは断然、藤壺の兄・兵部卿の出番ではないか。なのに、この人事を強行したところに、光源氏の兵部卿に対する厳しい政治的報復処置があったと見るべきである。（須磨巻）。光源氏は多分、皇族が摂政となる先例に乏しいとか何とか言い抜けたにちがいないからう。この意見は、光源氏召還時の朱雀帝の論拠でもあったから、かなりの説得力を生じたものと推測される。しかし、古いが聖徳太子の例もあるではないか。

【15】「人の国にも、こと移り世の中定まらぬをりは深き山に跡を絶えたる人だにも、をさまれる世には、白髪も恥ぢず出で仕へけるをこそ、まことの聖にはしけれ」とある。ここは、紂王を避けて北海の浜にいた伯夷、東海の浜にいた太公望呂尚が、周の文王が立ち上がったと聞かや、ともに文王の許に馳せ参じた故事をいっているのではないか。（『孟子』離婁章句上七十四）。

「深き山」「白髪」という発想からすれば、秦の時代に商山に難を避け、漢の時代になって出仕した四皓（四人の賢人）がよさそうだけでも。こういう設定は、光源氏の時代が理想政治の時代であるという意味を付与する効果がある。

【16】この時、太政大臣が六十三歳という年齢設定も注目される。前巻に、明石入道の年齢が六十をこそこ書いてあった。つまり、同時代人なのである。若い日、二人は必ず交錯していた。非常に想像力を刺激する設定である。（明石巻）

【17】宰相中将も権中納言に昇進。内大臣の光源氏とはいぶ差がついている。その権中納言の姫君が十二歳。入内が予定されている。しかも、この姫君が弘徽殿大后の妹・四の君腹。となると、これからの展開はなかなかみものである。権中納言とて、いつまでも光源氏との青臭い友情にばかりこだわってはいられない。敗残の弘徽殿大后方をも巻き込んだ新藤原連合でもって光源氏と対決する戦略だって考えられぬことではない。その昔、つまり源氏物語が始まる前のこと。左大臣と右大臣は連合し明石入道を中心とする源氏の勢力を駆逐したものと想像される。その昔の復活である。その時、太政大臣の摂政就任は、諸刃の剣となる。光源氏の孤立が一挙に進む事態とてありうる話である。この、今から予測される、光源氏と権中納言との関係の変化は、一世代前、つまり源氏物語が始まった当初の、左大臣と右大臣の関係の変化に対応しているという解釈はいかが。こう解釈して初めて、光源氏と葵上の結婚を怒った弘徽殿大后の心情が理解できるのではないか。あれは、左大臣の裏切りの始

まりだったのだという理解である。新藤原連合が出来るとすれば、過去の再現なのである。

【18】「高砂歌ひし君」の点描。彼も元服した。彼の点描は、賢木巻の沈淪時代を読者に思い起こさせる効果がある。権中納言は子だくさん。子だくさんということは、王朝政治家にとって絶対の条件である。「源氏の大臣はうらやみたまふ」は当然の反応。

【19】夕霧の童殿上。夕霧は現在八歳。彼は未だ元服していないわけだから、権中納言次男より少し年下である。光源氏の反応からすれば、元服後の夕霧は物凄いスピードで出世しそうである。さて、思えば、彼の出生の日より、光源氏の斜陽の日々が始まったのであった。感慨もひとしお、という構成である。このあたり、左大臣家の、回復した栄華を語り、光源氏の権力、彼の時代の開始を告げることに眼目がある。「ただこの大臣の御光に、よろづもてなされたまひて、年ごろおぼし沈みつる名残なきまで栄えたまふ」。光源氏は悲惨零落の一族を特別に厚く遇したものと知れる。なお、この逆の人生を辿った人々もいるはずである。名残なきまで沈んでしまった人々である。兵部卿。宇治八宮などである。

【20】二条院で光源氏の帰りをまっていた人々。「中将、中務やうの人」とある。この中将、幻巻に出てくる中将と同一人物であるうか。心変わりすることのなかった人々の重視。「年ごろの胸あくばかり」報いたいと光源氏は考えている。（19）。

【21】「二条の院の東なる宮」つまり二条東院は桐壺院の遺産。

これを改築している。「二なく改め作らせたまふ」とあるから、本格的改築である。光源氏の気持ちとしては、「花散里などやうの心苦しき人々」を住まわせることが予定された邸宅である。この記事も、彼の回復した栄華の点描にはちがいない。六条院構想の芽生えでもあろう。今、光源氏は「中将、中務やうの人」の相手はしているようだが、外歩きは出来にくい身分となっている。したがって、これまでどおりの習慣を維持するには、壁の内側に過去を保存する世界を自ら構築するはかないのである。

【22】「まことや」で、明石を話題にする。六条御息所的话题轉換である。いかに光源氏が、この時期、政治的に多忙を極めていたかが、実感される感嘆詞でもある。

【23】三月十六日、明石姫君誕生。三月初旬に派遣した使いが「とく婦」ってきたとあるので、二月十六日の可能性もある。が、後に五月五日が五十日であるという記述があるから、二月説は成り立たない。なお、明石が懐妊したのは前年の六月であったから、月数はちょうどよい。(明石巻)。光源氏の使いは出産に間に合い、確認して直ぐに帰ってきた。須磨巻では須磨はひどく近い印象であったが、ここでは明石の遠さを表現している。これが、実際の時間空間感覚である。

【24】宿曜の予言。「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」。若紫巻の夢占いの「おぼしもかけぬ筋のこと」の具体的内容が、いまここに披露されたということは、何を意味するか。読者は知らないが、光源氏はこの事実を知っていて、須磨明石に赴いたと

いう事実が、ここに初めて明らかにされたということである。したがって、光源氏の須磨明石行きは、「年ごろは世のわづらはしさに皆おぼし消しつる」とは言いつつも、決して自暴自棄の行為ではなく、ある程度成算を見込んだ政治的行為であったということの意味する。ということは、夢を信じた明石入道の若い日の行為と、光源氏の行為とは選ぶところがない行為であったということにもなる。明石入道の歓迎振り感激振りがいままながら思い起こされるところである。かくして、光源氏の須磨・明石は合理化され、屈辱の逃亡のイメージが払拭され、須磨・明石は名譽の負傷に格上げさせられる。須磨・明石は、決して光源氏の人生の汚点などではない。

【25】桐壺巻の高麗の相人、若紫巻の夢解き、宿曜。いずれも矛盾なく源氏物語の骨格を形成している。源氏物語の安定感はこの野太い骨格に負うところが大きい。なお、この予言でもって、紫上には子供が生まれないという事実も確定する。紫上は、光源氏の愛を頼りに生きる女、なのである。

【26】「当帝のかく位にかなひたまひぬることを、思ひのごとうれしとおぼす」。予言の内、「帝」が実現したのである。ということ、今生まれた姫君は「后」となることが、すでに生まれ童殿上をしている夕霧は「太政大臣」になることが確実である。「相人の言むなしからず」。ならば、二人には、これからそれぞれの地位に相応しい教育がほどこされてしかるべきということになる。これからの源氏物語は、教育論の様相を帯びるという、これは予告であらう。后はいかにあるべきか。太政大臣の理想

はいかに。という地点を目指した教育である。そういう予断を抱いて、これからの源氏物語を読む必要がある。

【27】光源氏が天皇となるという予言を光源氏本人は承知している。しかも、これが一人の相人の予言ではなく、「さばかりかしこかりしあまたの相人ども」と、複数の相人が予言したことである。しかし、こちらは「宿世遠かりけり」と、今のところ本人の「あるまじきこと」という意思でもって否定している。が、将来ありうるといふ含みは、こでしっかりと残している。作者の視界には若菜巻があるものと推察される。

【28】「住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひがひがしき親も及びなき心をつかふにやありけむ」という光源氏の心中思惟でもって、明石入道は自ら見た夢の話を、まだ光源氏に語っていないことが分かる。光源氏とて、相人および夢解きの予言を人に語っていない。夢は語ると破れる。(明石巻)。明石の女の姫君出産という事実でもって、光源氏は、今明石一族の意味を見直しているのである。読者と同様である。この予言は、したがって明石一族に対し決定的な格上げ作用をする。「このほど過ぐして迎へてむ」は光源氏の決意。

【29】東院は花散里とともに明石の女用でもある。この段階で、明石の女は、花散里の位置まで格上げされている。(21)。

【30】明石姫君の乳母として、明石に派遣されることとなった宣旨の娘の設定は興味深い。母・宣旨は桐壺帝に仕えていた人。父は「宮内卿の宰相」だから上達部。両親ともにすでに死亡している。「取りかへしつべきこちこそすれ」より推察される

ことは、彼女は母・宣旨につれられて、よく桐壺帝のもとに入り入っていた。その関係で、過去、光源氏は、この娘と知らぬ仲ではない。藤壺との関係、あるいは花散里を矮小化すると彼女になるという理解が適当であろう。今は、零落し幸せ薄い結婚生活にあるようだが、それを光源氏が、こうして救ってやったのだ。と考えると、これは蓬生巻の先触れとなろう。「まだ若く、何心もなき人にて、明け暮れ人知れぬあばらやにながむる心細さ」とある。なお、乳母が愛人である、あるいは愛人を乳母とする例は、よくあることであったらしい。〔栄華物語〕巻二〕。

【31】外歩きがほとんど出来ぬ状況にある光源氏が、わざわざ宰相乳母の家にやって来て、明石行きを懇請すること事態が、明石をいかに重要視しているかの証明である。「思ふさま異なることにてなむ」。それもこれも、みな宿曜の予言効果である。(24)。

【32】乳母に託した光源氏から明石女への手紙。「いつしかも袖うちかけむをとめ子が世を経て撫づる岩のおひさき」。「いつしか」は一時も早くの意味。手元に引き取り養育する意思を先ず言い、この姫君の長寿をことはいでいる。光源氏は鶴亀や千代に八千代という一般的発想など問題にしていない。何と「劫(カルパ)」を持ち出している。信じられぬ時間単位。天女が百年(三年ともいう)に一度降りてきて、八キロ四方の巨大な岩をその羽衣で一こすりする。これをくりかえし、結果その巨岩が磨滅してしまうまでの時間が、一劫(カルパ)。これを持ち

出し、空前絶後の明石姫君の重要性を、作者は表現しているのである。「子持ちの君」の感激、推して知るべしであろう。

【33】乳母の行程。京都から山崎までは牛車。そこから「津の国までは舟」。「それよりあなたは馬」。津の国のどこまで舟で行ったのか分からぬのが残念である。須磨のあたりまでだろうか。

【34】光源氏の乳母派遣は、明石一族を感激させている。乳母の質も最高であったためであろう。

【35】明石御方の、光源氏への返歌に注意したい。「ひとりして撫づるは袖のほどなきに覆ふばかりの蔭をしぞ待つ」。彼女は、率直に叫んでいる。私の手には余る。貴方、お願いします。その圧倒的な力で、この子の未来をひらいてください。この歌でもって、光源氏は、明石姫君を京都に呼ぶ決意を固めるのである。母の力。一番よいタイミングで明石御方は、叫んでいる。

光源氏の愛情に対する自信のなせる業であろう。

【36】明石姫君誕生と近々引き取ることを紫上に打ち明ける場面。作者は何故、紫上に子供を生ませなかったのか。光源氏の子供の少なさとも関連するが、世俗的栄達とは別次元の意味を紫上に与えようとしているのではあるまいか。たとえば、物語のただで棲息可能な存在の提示。源氏物語の成立基盤の中央に紫上が一回的に存在する処置。この方向で考えるべきではないか。

【37】というより、ここでは、何故作者が、明石の女の外に紫上を創造したのか。という根源的問題に立ち返る必要を感じ

る。それほど、このあたりでは明石姫君を破格に扱っている。

紫上は、この場合、豊玉姫の妹・玉依姫のイメージしかないと思いたくなるほどである。やはり、源氏物語は皇室起源の物語なのであって、光源氏と紫上の純愛物語ではないのかもしれない。

【38】紫上に「この人を、かうまで思ひやり言ふとは、なほ思ふやうのはべるぞ」という光源氏の言葉は、明石入道の言葉と同じである。この時点で、光源氏は明石入道のレベルでものを考えていることが分かる。夢は語れば破れる。

【39】紫上に明石御方のことを語る光源氏。これが光源氏の紫上に対する愛情表現だけれども、語られる方はたまったものではあるまい。そのうち手痛いしっぺ返しがかかるのではないか。

紫上の素晴らしさに、光源氏は明石御方とのことは「すさび」であったと思う。で、彼は何もかも語ったのだ。しかしながら、紫上は、自分がひたすら耐える日々を送っていたのに、光源氏の「すさび」にせよ他の女に心を許したことが許せぬと思う。この二人の「すさび」の思いは面白い。「われはわれ」と紫上は思う。これを心底思う日が遠からずくるのではないか。

【40】「はかなきことにて人に心おかれじと思ふも、ただ一つゆゑぞや」と光源氏は言う。人に恨みを買うと、紫上の命が危ない。だから、人に気をつかうのだという論理。これからすると、若菜巻で、紫上が六条御息所の霊に一端殺されるのは、明らかに光源氏の破綻なのだということが、分かる。

【41】紫上がすねて箏の琴を弾かない場面も面白い。読者にとっ

ても、明石の女が弾いた、明石別れの名場面は、まだ記憶に生々しいはずである。

【42】嫉妬は紫上の魅力の表現。「いとおほどこかにうつくしう、たをやぎたまへるものから、さすがに執念きところつきて、もの怨じしたまへるが、なかなか愛敬づきて腹立ちなしたまふを、をかしう見どころありとおぼす」。そう呑気なことをいってられない日が、きつと来ると読者は思うだろう。

【43】宿曜の判断の表示以来、明石の価値は断然上がっている。五十日にも、使いを派遣している。明石一族、乳母の感激、推して知るべしである。「わが御宿世もこの御ことにつけてぞかたはなりけりとおぼさる」という発想は、光源氏の奢り以外なものでもないけれど、読者には説得力のある考え方であろう。この時、明石の意味は光源氏の存在の意味を越えている。明石のために光源氏があるのであって、その逆ではない。須磨・明石は、こうして合理化されてしまう。権力者にとって、過去の傷は名譽の負傷と同義語である。過去の屈辱は愛敬となり、貴種流離譚をもって説明され濯ぎ去られるのみである。

【44】派遣した使いに「かならずその日違はずまかり着け」と命じている。明石到着日の指定である。これから分かるように、京都から明石には、一日では行けない。数日を要するのである。光源氏が行った時は、神仙の時間。ここは世の常の時間である。作者は二つの時間を意識して使い分けている。

【45】乳母が、光源氏のことを明石御方に「女ごころにまかせて限りなく語り尽く」している趣。後の落差のある解返への伏

線であろう。

【46】光源氏の文に「思ひ立ちたまひね」とあるのは、明石御方の叫びをうけたものである。明石御方の返事も「げに後やすく思うたまへ置くわざもがな」と応じている。明石御方は、確実に現実を動かしているのである。女の政治。彼女を、謙遜の権化のように誤解してはならない。

【47】明石御方からの返書を見て「あはれと長やかにひとり」つ光源氏。明石御方への愛情表現は本物である。嫉妬する紫上も、明石御方の筆跡を見て、人物を認めている。「やむごとなき人苦しげなる」。筆跡は人品骨柄の表現でもある。明石御方は、そもそも六条御息所に似ている女なのだ。（明石巻）。

【48】花散里邸訪問の記事。嫉妬する紫上からの逃避行であろう。「五月雨つれづれなるころ」である。光源氏の帰京は、前の年の八月頃であったから、約十ヶ月、間を置いている。権力者の日常とはこんなものかもしれないが、花散里の嘆きは当然であろう。ましてや他の女たちをや、である。この場面では、花散里巻とは違い、「女御の君」は軽く触れるにとどめ、「西の妻戸」つまり花散里をクローズアップしている。麗景殿女御と花散里の入れ替わりは、女御を継承する花散里の位置を明確にしている。いつの間にか源氏物語の世界に定着する花散里の不思議さは、この入れ替わりの妙に起因する。

【49】筑紫の五節の点描。親の勧め縁談を断り、光源氏を思っで生きる無償の人生を選択している。「世に経むことを思ひ絶えたり」。彼女は、世の常の人になることを拒否している。こ

うすることによって世の常ならざる光源氏のレベルを維持し、来ない光源氏を待つ人生を選択したのだ。しかし、光源氏は、彼女の選択を知っているのだろうか。非常に怪しい気がする。源氏物語で一番可愛そうな女は、筑紫の五節ではないか。しかし、源氏物語では、誰でも筑紫の五節になる可能性をもっていることを忘れるべきではない。

【50】五節は、東院に置いておいて、子供でもできた時の乳母にしようとする源氏は思っている。つまり、この巻の宰相君のように扱おうということである。しかし、五節がこの後、東院に収容されたという記事がない。構想だけで終わってしまったものとみえる。

【51】東院の作り方。「よしある受領などを選びて、あてあてにもよほしたまふ」。これは、道長の遣り方である。

【52】一方、臘月夜は「憂きに懲りたまひて、昔のやうにあひしらへきこえたまはず」という人生を選択している。五節との対照が鮮やかである。彼女は、ようやく光源氏の愛の実体に気づき、二心ない朱雀院の方を向きはじめた。退位後の「院はのどやかにおぼしなりて、時々につけて、をかしき御遊びなど、好ましげにておはします」のは当然である。【6】。

【53】東宮が梨壺にいる。光源氏の宿直所は、「昔の淑景舎」つまり桐壺だから「近隣の御心寄せ」で、東宮とその母・承香殿女御と光源氏の関係は良好である。この母は、他の女御たちが朱雀院の側にいるにもかかわらず、臘月夜に圧倒された過去の経緯からか、朱雀院を離れ光源氏の側に来ている。これで幼い

東宮も安定し、光源氏の長期政権への布石は盤石というところであろう。東宮は、将来の明石姫君の夫君と目される人である。ところで、この承香殿女御の兄が髭黒。彼の動静も気にかかる。妹と同じ行動をとっているのだろうか。当初は弘徽殿方ではないはずであるが、徐々に光源氏側にシフトしているのではないだろうか。さらに言えば、臘月夜に子供が生まれぬ、という事実、そして父大臣の死が、弘徽殿一派の戦略を断ち切る作用をしていることに留意したい。

【54】東宮が宮中にいることが確認された。ということは、前坊も宮中にいたわけである。前坊は東宮を辞めた後も、宮中にいたのだろうか。六条御息所と結婚した時も。

【55】桐壺は、源氏物語においては、政権に関係なく、一貫して光源氏、あるいは光源氏一族のものである。こういうことが許されるのだろうか。後宮の私物化。当時、天皇を私物化する政治体制・撰関制度であり、なおかつ、里内裏の時代であったから、こういう公私混同が可能であったと考えるべきか。詳しく調査する必要がある。この、桐壺の保全是、桐壺の精神の保全であり、源氏物語上における意味は大きい。

【56】藤壺が准太政天皇となる。これは、藤裏葉巻でそうなる光源氏と対となる構想であろう。藤壺は、いつも光源氏より先を走る。光源氏は永遠に追いつけぬ、ということか。藤壺は、准太政天皇となることによって、宮中に「おぼすさまにて参りまかたたまふ」状態になり、我が子・冷泉帝と自由に対面可能となった。藤壺の栄耀栄華、幸せの頂点である。

【57】光源氏の弘徽殿太后に対する気味の悪いほどの心配り。これも、将来への保険ということだろう。光源氏は、なかなか周到な男なのである。

【58】兵部卿への冷淡な処置。紫上に対する留守中の態度に起因するのであるから、これは、光源氏の紫上への愛の処置と考えることができる。(19)。がしかし、彼が藤壺の兄であることを考えると、藤壺の影響力の限界を示す意味合いの方が強いのかもれない。また、この処置は、藤壺の准太政天皇就任と微妙に係わるもので、これによって強大となることが予想される藤壺一族への牽制の意味合いもあろう。事実、光源氏の態度には、藤壺も困惑している。「いとほしう本意なきことと見たてまつりたまふ」。さらには、帝の、名乗れない実父と、世間周知の伯父。その実父が伯父を排除する当然の心理、人情の自然として了解することも可能である。これも恩愛のテーマの一端であろう。

【59】八月。権中納言の女人内。これが、弘徽殿女御。兵部卿の宮の中君も入内準備。光源氏は、この件については冷淡である。なお、「中君」としている点に注目したい。大君は、髭黒と結婚している。これは、真木柱巻までゆかぬと分からねことだが、作者にとっては予定の行動と見える。

【60】秋。住吉への願果たしの場。現在の光源氏の栄耀栄華の実体を、白日のもと、満天下に示す意味がある。「世の中ゆすりて、上達部、殿上人、われもわれもつかうまつりたまふ」という盛儀である。たまたま同じ日、住吉に参詣した明石の御

方は、この光源氏の威勢に驚嘆。いまさらながら「数ならぬ身」の程を知り、その落差に愕然とする。これによって必然不可避免的に招来した自尊心の崩壊が、明石姫君を紫上の養女として差し出す近未来の決断の支持基盤となる。都の頂点に立つ男と、「田舎の人」とは、愛のレベルではともかく、社会的レベルにおいては、全く釣り合いがとれぬこと。明石御方が光源氏と結婚するということは、玉の輿以外なものでもないことを、この場をかりて作者は読者に確認しているのである。

【61】右近の尉、良清。それぞれの出世。光源氏に賭け、須磨に同道した過去が今報いられたのである。浮かぶ者と沈む者、この巻のタッチは、きわめて生臭い。これは、関屋巻への自然な流れとなる。かれらが尾羽うち枯らしていた時を知っている明石の女の目を通して、今日の盛儀を見ているから、なおさらにかれの栄花が鮮やかに表示されるのである。

【62】「河原の大臣の御例」を持ち出したのは何故だろう。源氏の栄耀栄華、豪勢な行列の先例を求めれば、源融以外にないということか。ここで、光源氏のイメージを融にダブらせておくと、以後の展開がだいぶ楽になることは確かであろう。六条院造宮への布石。池は海。融は天皇になりたくて果たせず、天皇のような生活で憂さを晴らした。今、光源氏が融の見果てぬ夢を見る、という構図であろう。

【63】夕霧は乗馬姿であつたらしい。その「馬添童」たちの衣装はお揃いで、目立った行列であつたとみえる。それに付けても、「数ならぬさまにてもものしたまふさまにてもものしたまふ」

姫君のことが思われ、明石御方は「いよいよ御社のかたを拝」むことになる。彼女はここで、自分が生んだ姫君の、容易ならぬ未来をとことん理解したことであろう。住吉社頭の邂逅の意味は、そのあたりにあるのではないか。

【64】「今日は難波に舟さしとめて、祓へをだにせむとて、漕ぎ渡りぬ」という記述より、住吉は現在の位置でよいのだと考えられる。本住吉は、地理的に見て無理だろう。

【65】住吉と明石の女、北山と紫上。明石の女は海の女、紫上は山の女。こういう対比は許されてよいと思う。これに、古代神話、海彦山彦をかぶせて了解すると、源氏物語の構造が透けて見えてこないか。源氏物語は皇室起源の物語。それを書いたのは、天皇が天皇でなくなっていた時代であったからではないか。

【66】惟光から、明石御方一行のことを知らされた光源氏は「神の御しるべ」を思っている。光源氏と明石御方は、住吉の神様のなかだちで、結ばれていることを、この擦れ違いで、改めて確認しているということである。「みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな」。

【67】明石の女の独詠。「数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ」は、何も知らない女の、素直なよい歌だ。けれども、そう心配することはない。間もなく、あなただけは救われる。という読者のエールが聞こえてくるような歌である。

【68】落標という語は、「元良親王の歌「今はた同じ難波なる」

で、不倫が露頭し、やぶれつかぶれになった、命がけの恋を連想させる言葉である。ここでは、身分もものかわ、この恋遂げずにおくものか、という光源氏の強い決意表明として機能している。明石御方に対する絶対的愛の基調音として、この歌が流れていることが分かる。この巻は、いうなれば明石御方を確立する巻である。

【69】惟光が差し出した「柄短き筆」は面白い。かれは急の御用のためにいつもこれを懐にいられているらしい。矢立のようなものか。

【70】光源氏の歌「露けさの昔に似たる旅衣田蓑の島の名には隠れず」には、「隠れ蓑」の発想がある。隠れ蓑を着て、「人目もつまずあひ見まほし」という光源氏の熱い思いである。隠れ蓑は、打出の小槌とともに鬼ヶ島にある秘宝。龍宮イメーজの明石にこれを用いるのは一定の意味があるというべきか。

【71】上達部と戯れる遊女を疎ましく思う光源氏。「いでや、をかきことももののおはれも、人からこそあべけれ、なのめなることだに、すこしあはきかたに寄りぬるは、心とどむるたよりもなきものを」。彼は確実に変わってきている。源氏物語に即して言えば、夕顔から空蟬への転換である。「あわきかた」より「人から」「人から」の人、明石の女の浮上である。明石の女は、空蟬の、見果てぬ夢を実現する存在だということが、いまさらながら確認させられよう。空蟬が、光源氏の相手として、源氏物語に最初に登場する意味もまた、だんだんと明らかになってきたことであろうか。明石一族の重要性は、た

だことではない。

【72】光源氏は帰京するやいなや、明石に手紙を出している。

「このころのほどに迎へむこと」を内容とする手紙である。光源氏の実体を目の当たりにした明石御方は、逡巡する。濔標巻は、明石の「心尽くし」の巻でもある。

【73】光源氏に要請にしたがって、京都へ出て、悩みは尽きないだろうという明石女の発想。「島漕ぎ離れ、中空に心細きことやあらむ」。前に、隠れ蓑を出している、ここは鬼ヶ島のイメージになっている。と思うのは考えすぎか。

【74】「まことや」で、また舞台が変わり、六条御息所の登場となる。源氏物語における「まことや」は、六条御息所登場のための感嘆詞の感が深い。

【75】政權交替で齋宮も代わる。一緒に帰京してきた六条御息所の態度は、朧月夜に似ている。(【52】)。光源氏もまた、「わが心ながら知りがたく」、愛をおしすすめる自信がない。関心はむしろ齋宮の方に移っているように見える。六条御息所はもはや過去の人である。伊勢の別れの月日が、このような作用をしたのである。世代交代である。

【76】「六条の旧宮をいよく修理しつくりろひたりければ」とある。後の六条院造宮の基点となる場所である。

【77】六条御息所が、にわかに病の床に就き、ためらうことなく出家してしまう。見舞いに来た光源氏に遺言を残して、あっけなく死んでしまう。どうしてこんなに事務的にとんとんと作者は処置したのか。恐らく、六条御息所に似、彼女の政治的夢

を実現することになる明石御方の登場で、六条御息所の存在する意味は一挙に失われたためだと解釈すべきであろう。

【78】六条御息所が齋宮の後事を光源氏に託す、ということとは、他に託す人がいなかったということであろう。と同時に、彼女には光源氏に託してよい理由があったためだと推量される。御息所も、光源氏の、失われた一族・桐壺族であったと考えておくことよいのではないか。仕えている者たちに「わかむどほり」が多かったという記事もその辺の事情を示唆しているように思う。

【79】娘には自分のような人生を歩ませたくないというのが、御息所の基本的発想である。「女は思ひのほかにてもの思ひを添ふるものになむはべりけれ」。六条御息所の人生の総括であろう。「かけてさやうの世づいたる筋におぼし寄るな」は、実に露骨で、明確で具体的な指示である。これは、後々若菜巻で展開される女三宮の処置についての朱雀院の心理、夕霧巻に描かれた落葉宮の母・一条御息所の心理、そして宇治十帖の冒頭にある八宮の心理の先行型として理解しておいたらよいのではないか。彼らは皇女の身の処し方について一定の観念を有していた。今、六条御息所の心理は「皇女」としての前齋宮のあらまほしき処世を光源氏に願っているのだ。という理解である。前齋宮は、断じて天皇の孫としての女王ではなく、天皇の子「皇女」として扱うべきだ。というのが、光源氏への御息所の最初のメッセージであった。ということなのではないか。御息所の見果てぬ夢を、前齋宮の処置によって実現してほしいとい

う心理であろうと思う。

【80】光源氏は、几帳のはころびから、御息所の最後の姿を見ている。この場面は、印象的である。「心もとなきほどの火影に、御髪いとをかしげにはなやかにそぎて、寄りゐたまへる、絵にかきたらむさまして、いみじうあはれなり」。この場面は、光源氏が明石で明石の女を最初に見た印象の復習になっている。御息所をここに出した意味は、明石との符合であろう。

【81】その日の七八日後。御息所が死ぬ。彼女は、前坊との夢を果たせず、光源氏との愛を後悔しつつ恨みを残して死んでいったわけである。特に前坊の夢の挫折は、政治的挫折に根ざしているのだから、彼女が今後死霊となって現れることが、充分に予測できる死に方である。「この世にて、その恨みの心とけず過ぎはべりにし」は、光源氏本人の証言である。

【82】遺言の重みは、このあたりでは絶対である。したがって、御息所の遺言を光源氏が破ることは考えられない。これは、六条御息所に対する、作者からの、せめてもの饒であろう。

【83】桐壺帝が斎宮のことを「同じ御子たちのうちに数まへ」でいた、ということ、前坊と桐壺帝は非常に仲がよかったものと考えられる。この言葉で、光源氏は前斎宮を妹として扱うということ、御息所に告げているのである。

【84】「またたのもしき人もことにおはせざりけり」とあるところを見ると、六条御息所の現在は、桐壺更衣の母の死の時のような情況にあったものと理解される。過去の栄華は見る影もなく、瘦せ細った状態であったと見える。光源氏のこれからは、

そういう瘦せ細った一族の栄華の回復、復活を実現することになろう。

【85】さて、斎宮の処置であるが、光源氏は入内を考えている。冷泉帝は光源氏の子。前斎宮は光源氏の妹感覚の人。【83】。年齢の差が気になるところである。本来、前斎宮は光源氏の世代と結婚すべき世代の人なのである。もっとも、光源氏にしても「わが御心も定めがたければ」、人にはまだ言っていない。遺言は遺言として、光源氏の心は揺れているのである。

【86】六条御息所邸の場所が書かれている。「下つかたの京極わたり」。六条京極。源融の河原院のあったあたりである。光源氏を融に比定する、この巻の基調に矛盾しない。【62】。

【87】朱雀院の求婚。斎宮は、朱雀院と結婚するのが自然なのである。ということ、朱雀院と兄弟である光源氏と結婚することも自然ということになる。この朱雀院の恋の、光源氏による邪魔だて、つまり「横取り」は、六条御息所の遺言によって封じられた自分の恋情に起因した不純な動機によるものだ。斎宮を幼い帝、自分の実の子に添わせるということは、屈折した、いやしい情念以外のなものでもなからう。六条御息所と自分の、一世代へだてた関係を、子供におしつけているのだということ、この時、光源氏は意識していない。死んだ御息所がこれを喜ぶかどうか、はなはだ心許ない。

【88】この院の求婚は、一世代前の御息所の結婚を想起させるものである。このようにして、御息所は前坊から求められ、彼女はそれに応じたのではないか。

【89】この斎宮の入内をめぐって、光源氏と藤壺とが額を寄せあって相談する場面は、まことに象徴的場面である。紅葉賀巻以来このかた、終始藤壺の後塵を拝してきた感のあった光源氏は、今や藤壺と同じレベルにあって、政治をきりもりしている。これが、光源氏の須磨・明石の帰結なのである。これを、正面きって示そうというのがこの巻の眼目である。冒頭の法華八講とこの場面でもって、この巻は巨大な額縁を嵌められた絵となる。政治という額縁である。

【90】一旦、前斎宮を光源氏の養女とする。そして、請われて入内という形にもってゆこうという光源氏の戦略。紫上は、その場合、養母ということになる。彼女はこれを「うれしきことにおぼして、御わたりのことをいそぎたまふ」とある。紫上も、いっしか政治家の妻となつて、光源氏と一心同体となつて行動している。これは、まもなく起こる明石姫君の取扱いの予行であろう。しかし、子供の少ない光源氏の後宮政策は、前斎宮を繋ぎとして利用する道を選択するほかなかったというのが実際のところかもしれない。

【91】兵部卿の後宮政策。姫君の入内を準備中である。藤壺は、光源氏と兄との「隙あるなか」に心を痛めている。が、結局のところ藤壺は光源氏に頼っている。帝の父親だから当然といえは当然の心情であろう。

【92】権中納言は、昔の頭中将。彼の娘が「弘徽殿の女御」とよばれている。時代は変わった。娘の呼称には、今度は権中納言が、光源氏の仇役になる暗示もあらうかと想像される。

【93】「宮の中の君」の強調。読者に大君を意識させる操作であろう。大君は、鬚黒の妻なのである。【59】。

【94】藤壺とて「いとあつしくのみおはしま」すとあるから、彼女の時代も、まもなく終わりそうな雲行きである。

蓬生巻

【1】末摘花の後日譚である。光源氏の暗黒時代は、末摘花にとつても深刻な時代であった。光源氏以上の暗黒時代が招来したと考えられる。その時代を、末摘花がいかに生きたかをここで語る。今なぜ末摘花か、これが、この巻の重要なテーマであろう。

【2】すでに読者の方は、光源氏の受難から復活までの道筋、つまり源氏物語の本道を辿つてしまっている。その道筋を、もう一度、現在まで末摘花に即して辿る。いうなれば、脇道から光源氏の姿を、つまり葵・賢木・花散里・須磨・明石・濡標の巻々を、裏側から眺めてみようというのである。これは、いままでと違った視座を作者は用意している、ということの意味する。帚木三帖の手法、であろう。当然、そこには、批判的・露悪的な世界が展開されるものと予想される。あるいは、これは、縦の並びであった末摘花巻の手法の復活だともいえる。遠く、竹河巻や宇治の八宮物語の例もこれにあたる。さて、末摘花という極限状況を描き、極限だからこそ描ける身も蓋もない現実の提示が、ばかしたままにして済ましてしまった本編の現実

を炙り出すという手法である。何せ、主人公が末摘花である。尋常の沙汰で済むはずがないではないか。現実暴露の悲哀は、最初から予測しておいたほうがよい。

【3】紫上の場合、別れていたといつても、音信は絶えず、常に光源氏の情報さえ、また世話もしていたのだから、幸せというものだ。という発想で、一気にこの巻のトーンは決定する。案の定、綺麗事で済む話ではなさそうである。

【4】須磨巻に描かれた「見送る女」たち。例えば、紫上・藤壺・花散里・朧月夜などといった主要な人物以外にも、光源氏の悲遇を我が事として、悲嘆にくれていた女たちは、大勢いたわけである。末摘花は、その他大勢の女の代表として、先ず位置づけられている。

【5】「大空の星の光を鹽の水にうつしたるここち」は、言いえて妙だ。光源氏の愛情は、大空の星のふるごとく廣大無辺。これを戴く末摘花は、鹽の水のような狭さ。しかし、しっかりとお零れにあずかっているという様子。手の届かぬものを我が物とした心地の意味もありそう。この部分、七夕の風習以外に何か別の出典があるような気がする。後考に備えたい。

【6】光源氏は「遠くおはしましにしのち、ふりはへてしもえ尋ねきこえたまはず」という状態であった。「いかめしき御勢」がなくなれば、その恩恵に及ぶ範囲も自ずから縮小される。末摘花の世界は、光源氏の愛の世界では辺境部分に位置する。したがって、その恩恵範囲から逸脱してしまったらしい。というのは理論的で正しいがいかに悲しい。「わざと深からぬかた」

ならいたしかたなしか。「深きかた」の例としては、長雨で崩れた花散里の家の築地の修理を、須磨の地から命じているという小さな記事を思い起こせばよからう。(須磨巻)。末摘花は、花散里よりずっと遠くに位置し、光源氏の思念のほとんど極北にある。その意味では、前巻の、筑紫の五節に近い。(落標巻)。

【7】羽振りがよくなると集まり、悪くなると散ってゆく女房階級の現金さ。彼女たちにも生活がある。背に腹は変えられないのである。世の常というべきであろう。貧乏暮らしに慣れていた者が、一旦普通の暮らしを経験すると、再度の貧乏には「いと堪へがたく思ひ嘆く」ことになる。これも人情の自然である。「女ばらの命堪へぬもありて」は残酷なお笑い。末摘花の世界は、古い世界。したがって構成員も古い。経済の逼迫は、彼女たちの命を軽く奪う。

【8】光源氏に忘れられ、庇護を失った常陸宮邸は、かつての、夕顔の死の舞台となった某院のような有様となっている。狐の住処。梟。木霊。某院の全盛時代は、だから、この常陸宮邸の全盛時代にはば一致すると考えるのが自然であろう。末摘花巻にも、この邸宅と某院を比較する場面があった。(末摘花巻)。

【9】某院と、現在の常陸宮邸を二重写しに理解すると、末摘花は、生きた物怪というイメージになる。それでよいか。

【10】困窮した貴族のところに、えげつない現実が襲ってくるのは、いかんともしがたい。家を買いたいという成金受領。名工の作品を欲しがると悪徳骨董蒐集家。末摘花が頑として拒否し、家と調度にこだわったのは、ここで過ごし、これを見よと残し

てくれた父・常陸宮の「御本意」のためである。父に殉ずる女。この巻の末摘花は、遠い宇治八宮の娘・大君の祖形である。ちなみに、その八宮はこのころが全盛時代。弘徽殿太后によって東宮擁立が画策されていた頃である。大君はまだ生まれていない。父の意思を守る女。末摘花は、父の意思を守って幸せになる女、という点で大君とは違う。その意味では、父の意思を継ぐ女である明石の女との関連を、ここはおさえておく必要がある。そうすると、末摘花の存在が、明石の女の突出を抑制する効果を狙っていることも理解されよう。

【11】「受領どもの、おもしろき家造りこのむ」とある。受領階級の実力を、作者はしっかり押さえて書いている。この巻に登場する叔母、あるいは次巻の常陸介の豪勢な帰還描写を意識した点描だと考えられる。世に従う心を使ったものと、使わぬものと。このあたりの源氏物語のテーマである。

【12】「人の聞き思はむこともあり」。末摘花は「人聞き」を考える女性なのである。空蟬、明石御方系列の人。誇り高く生きようとする女である。明石御方と同系ということが、この巻を理解するポイントである。

【13】末摘花は、王家統流の処世を考えているのではないか。皇女は本来独身が原則。結婚するにしても、臣下との縁組はほとんど稀である。八宮が大君中君に遺言した内容が参考になる。近い例としては、朝顔が、同じく末摘花のような発想で人生を選択している。

【14】「親の御影とまりたるこちする古き住処」。河原院の融

のイメージである。常陸宮も、生前は、昔の融、昭和の大河内伝次郎の如く、自分の館に憂き身をやつし、稼ぎを注ぎ込んだものと思われる。

【15】末摘花邸の家具調度は、名のある作家の手になるもので、骨董家の垂涎的であったと想像される。黒貂の皮衣や秘色のことが思い出される。（末摘花巻）。こういったものを売りながら生活する道を女房たちは末摘花に助言している。「いかがはせむ。そこそこは世の常のこと」。源氏物語は「世の常」でない世界を語ることをもって基調としている。この末摘花の物語は「世の常ならざる」世界が「世の常」の世界によって相対化される物語である。そして、「世の常ならざる」世界の価値を問うというのが、本義であろう。本文に則して言えば、源氏物語は、「亡き人の御本意違はむがあらはれること」という発想を支持する物語なのであることを忘れるべきではない。

【16】「御兄の禪師君」は初出である。常陸宮家のおそらく長男であろう。彼が出家しているという設定も想像力を刺激する設定である。やはり、末摘花一族は、明石一族と同じ運命に襲われたのではないか。兄の禪師君は、「世になき古めき人にて、同じき法師といふなかにも、たづきなく、この世を離れたる聖」で、家や妹の窮状などちっとも気にしないタイプとみえる。育ちのよさか。明石入道とは対照的である。この兄妹、ともに尋常の人ではない。

【17】「八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どもの、はかなき板葺なりしなどは、骨のみわづかに残りて」とい

う散々な憂き目にあう。野分巻の予行か。こういう世の常の生
活の場面も、源氏物語の本流から離れ、異端の趣をかもす要素
になる。「世の常」の描写する世界は、ホームドラマ指向とな
る。

【18】「下の屋」は、「下衆」のいた施設である。ここに、トイ
レや風呂、炊事場などがあったのではないかと想像される。

【19】それにしても、末摘花邸の外周は牧場と化し、盗賊もみ
くびって寄りつかないとは、相当の酷さである。盗賊への言及
も、この巻の異端性を示して余りある。源氏物語には盗賊の類
は、あまり出てこない。当時、横行していたにもかかわらず、
である。

【20】「親のもてかしづきたまひし御心のままに」というのが末
摘花の終始変わらぬ処世訓である。親の時代の価値観に殉じて
生きる。宇治の大君の発想である。時代が激しく変われば変わ
るほど、末摘花の世界は異様になる。異様に見えるのは、それ
だけ変化の激しい激動の時代であったということである。末摘
花と宇治の大君との違いは、魅力のあるなしにすぎない。一世
代前の慎み深い文化が、ここに保存されている。光源氏は、そ
の古い文化を復活再生させる男なのだという流れも、忘れるべ
きではない。

【21】『唐守』『貌姑射の刀自』『かくや姫の物語』といった作品
が末摘花の厨子にあった。これらは、いずれも古いタイプの物
語であったということが知れよう。しかも、絵物語化されてい
たものである。高級貴族の姫君用の物語は、だいたい絵物語で

あったと考えるべきか。源氏物語が、絵台巻でその『竹取物語』
を称揚することになる点も注意すべき点である。こういう古く
うるわしい系統を継ぐ路線上に源氏物語はあるということ、を、
作者はさりげなくここで言っている。

【22】末摘花の愛好する歌も浮世離れたものであった。「古歌
とても、をかしきやうに選り出て、題をも読人もあらはし心
得たるこそ見どころもありけれ」という記事から察するに、
『古今集』や『伊勢物語』『大和物語』といった類のものではな
く、貫之が『古今集』に編集収録した作品群の原資料となった
一昔前の歌集を末摘花は見ていたものと推察される。

【23】女の読経・勤行のたぐいは、最近の流行だということが分
かる。昔の女は、こういうことは決してしなかった。したがっ
て、末摘花もしない。

【24】侍従は末摘花の乳母子。彼女だけは、ずっと末摘花に付
き従っていた。すると、最初に光源氏に末摘花を紹介した大輔
の命婦などは、とくに末摘花を見限って、受領の妻かなんか
に収まり、地方暮らしをしているものと思われる。彼女は身持
ちのあまりよいとはいえない質の女性であったから。

【25】母方の叔母という人物も変わっている。「世におちぶれて
受領の北の方になりましたまへる」と書いてあるから元々は高貴な
家柄の人であったに違いない。末摘花の母もその姉か妹であっ
たわけであるから当然最高級貴族であったことがこれで分かる。
その叔母が受領風情と結婚している。この結婚を、常陸宮家では、
「面伏せにおぼした」とらしいから、この叔母は、自分の意

思でもって下賤な、受領階級の男の許に走ったという設定である。明石入道の人生選択と一脈通じるものがあることに注意しよう。が、彼女には、明石入道のように再挙を期するなどという気はさらさらなく、色と欲に生きる身も蓋もない露骨な反貴族的人物で、末摘花や禅師君の対極に位置する女である。あとで登場してくる近江君の脈絡で理解すべき人物かもしれない。いよいよ、ホームドラマである。

【26】高級貴族の娘が受領の妻になる。これが、いかに面目を失墜することかということが、ここで明示されている。後宮に入ることが予定されていた空蟬が、伊予の介の妻となっていて屈辱が、いまさらながら理解される。その空蟬が、次の巻で登場してくるのも、心理的な流れに沿った処置といえよう。

【27】侍従の母と、この叔母とは親しかったらしい。同世代で、末摘花の乳母になった事情も、この叔母の線であったのかも知れない。「通ひ参りし斎院亡せたまひなどして、いと堪へがたく心細き」侍従が、この叔母を頼ったのも自然な成り行きというものであろう。

【28】作者の、叔母解説も面白い。身分の低いものは、とかく上流階級の真似をして「思ひ上がる」ものである。もともと高貴な人が、受領風情に進んで身を落とすということは、避けがたい「宿世」というものであって、本来そういう人なのだ。「心すしなほなほし」いのは当然である。

【29】末摘花を引き取り、娘の使用人にしようとする叔母は思っている。『落窪物語』のような、苛め返しの世界を読者は想像す

るかもしれない。しかし、苛めの対象というものは、たいてい可愛そうな美少女と相場は決まっている。そこに、浮世ばなれした異形の末摘花をもってくるところ、作者もなかなか食えない女性である。

【30】「御琴の音」とは懐かしい。末摘花は、琴（きん）を弾く女であった。光源氏の系統の女性なのである。琴（きん）は大陸文化の象徴的楽器。

【31】叔母の夫が大式になる。受領としては、破格である。叔母が強気にでるのはもっともな話である。この大式は、筑紫の五節の父の後任かとも思われるが、あれは須磨巻の話。これは、光源氏帰京の後赴任しているから、その次の次の大式なのであろう。光源氏に忠勤を励んで得た官職であろう。東院でも請け負ったか、などと想像したくなる。（濤標巻）。本文の配列から見て、光源氏帰京の前に、大式就任が決定されているので、光源氏に対する忠勤云々は無理かもしれない。忠勤は、弘徽殿大后方へのものであったと想像される。とすると、末摘花の拒否は、光源氏への忠誠の表示ということになる。そう考えるべきか。

【32】末摘花の性格。「こちたき御ものづつみ」。遠慮のかたまり、なのである。

【33】「ことよがる」叔母。この叔母のためめかきは絶品である。こういうタイプは、今も昔も多い。鼻持ちならぬ偽善者。言いたいことを言う女。思いやりの塊のように振る舞う思いやりのない女。現金な女。

【34】叔母の言葉、「藪原に歳経たまふ人」は言いえて妙である。こんな人を、光源氏が「やむごとくなくしも思ひきこえたまはじ」。その通りかもしれない、と読者は思うだろう。「宮、上などのおはせし時のままにならひたまへる御心おごり」も、正確な末摘花認識である。時代認識というべきか。これが、世の常、世の常識というものである。明石一族が、京都にいつづけたら、末摘花のようになっていた、ということであろうか。その意味で、この巻は、明石一族の補強となっている。末摘花が、この位置にあらねばならない一つの理由であろう。

【35】帰京した光源氏は、掌を返したように、自分に靡く世間の人の現金さに辟易としたらしい。彼はちょっと人間不信に陥っている。その心理のなかに、一旦末摘花が埋没する結果となつたことは、気の毒である。が、だからこそ、末摘花の変わらぬ、誇りを失わない処世が光源氏の胸を打つ結果を将来したのである。

【36】生きる唯一の頼みであつた光源氏が、叔母の予告通り、末摘花のことを忘れていたのだから、末摘花としてはやるせない。やるせないが、世間の人のように恥も外聞もなく光源氏に擦り寄るのは、彼女のプライドが許さない。「人知れず音をのみ泣きたまふ」ばかりである。末摘花は、明石巻末の筑紫の五節のように、光源氏に歌を贈つたりしなかったのである。（明石）。

【37】「萌え出づる春に逢ひたまはなむ。石（いは）走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも。万葉集巻第

八の劈頭を飾る「志貴皇子の歎（よろこび）の御歌」の一節である。志貴皇子の歌を引いた理由は何か。含むところが何かあるのだろうか。ご存じの通り、志貴皇子は桓武天皇お祖父、光仁天皇の父。天智天皇の子。本人は皇子のまま生涯を終えたが、死後六十数年後に、光仁天皇が即位したことによって天皇位を追贈された人である。天皇の父というイメージ。そして天智の正統を受け継いだ親王というイメージが、この時期の光源氏に必要なであつたためかもしれない。

【38】叔母の発想は面白い。「仏聖も、罪軽きをこそ導きよくしたまふなれ」。巨悪は、仏聖の影響の外だ。皮肉な現実をよく見据えた端倪すべからざる立言というべきであろう。「宮、上などのおはせし時のままにならひたまへる御心おごりのいとほしきこと」も、正確に現実を描写して余すところがない。

【39】叔母のもう一つの名言。「世の憂き時は見えぬ山路をこそは尋ぬなれ」。光源氏や明石入道の説明になっているところが可笑しい。

【40】周りの女房も卑屈になってマゾヒスティックな言をはく。「さもなびきたまはなむ。たけきこともあるまじき御身を、いかにおぼして、かく立てたる御心ならむ」。こんなこと言われたら末摘花には立つ瀬がなからうに。彼女たちには、末摘花の異形はすでに承知のことであつたと見える。

【41】唯一の理解者であるべき乳母子・侍従は「大式の甥だつ人」と恋に落ち、是が非でも九州に付いていく心境にある。彼女は、乳姉妹である主人・末摘花を捨て、自分の愛に走ったの

である。で、末摘花に九州行きをおためごかしに勧める。叔母と選ぶところはない。

【42】それでも末摘花は、あてにはならぬ光源氏をあてにして待つ。彼はきつと尋ねて来てくれる。「山人の赤き木の実一つを顔に放た」ず付けて彼女は待つのである。「あはれに心深き契りをしてくれた光源氏を純粹に信じる女。その純粹さを際立たせるために、作者はわざと末摘花の心以外のものを徹底的に醜くしているのかもしれない。末摘花を救わぬかぎり、光源氏の誠実さは不純なのだ。という視点は、かくて確立される。もし、光源氏がこの末摘花を見捨てるなら、赤い木の実を顔に付けた女を許すことができない「おぼろけの人」と同じであることになってしまうからである。

【43】この末摘花に比べると、筑紫の五節はもっと哀れである。彼女は、ここの末摘花と同じように考え、光源氏をひたすら待ったのである。彼女は、赤い木の実を顔になどつけていない。歌も上手い美女だ。が、結局、光源氏が来ることはなかった。筑紫の五節は末摘花より極北にいる女なのだ。

【44】冬が来る。光源氏の法華八講の記事。ここで、ようやく濡標巻冒頭の時点に到着する。この巻も、かつての末摘花巻同様、縦の並びの巻なのである。

【45】この法華八講には、「ことに僧などはなべてのは召さず、才すぐれ行ひにしみ、尊き限り」の僧が選ばれた。したがって、末摘花の兄・禪師も選ばれたのである。禪師の実力のさりげない提示である。

【46】その兄・禪師が、八講の帰りにやってきて、光源氏を「仏菩薩の変化の身」と絶賛するところ、面白くもやるせない場面である。光源氏も光源氏だ。禪師の姿を見掛けたら、末摘花のことを思い出し、消息を聞いてくれてもよいではないか。「心憂の仏菩薩や」と末摘花が「つらうおぼゆる」のももったもな話である。この段階で、末摘花の光源氏への信頼感は相当にぐらついている。読者も同じであろう。晴れの目と曇の目の対照。曇の目から見ると、美しい現実も相当に醜い。並びの巻の批判精神は健在である。(2)。

【47】叔母の突然の来訪は、絶妙のタイミングである。末摘花の光源氏に対する絶対的信頼がぐらついた後だからだ。また、この突然の訪問は、後に描かれる光源氏の突然の来訪の先触れである。もし、最初の突然に末摘花が従っていたなら、次の突然はない。スリリングな運命的展開を作者は書こうとしているのである。

【48】末摘花邸の門は、末摘花巻でも印象的に描かれていた。その昔、光源氏がやっと開けた門が今、叔母が開けようとしたら「よろぼひ倒れ」てしまった。なにやら暗示的な場面である。末摘花は、この叔母の誘いによるめくかもしれない。

【49】侍従の「容貌などおとろへにけり」と書いてある。末摘花巻からここまで、およそ十年経過している。末摘花と侍従は同年である。三十を越えているか。

【50】叔母の言葉「故宮おはせし時、おのれをば面伏せなりとおぼし捨てたりしかば、うとうとしきやうになりそめしかど」

より、判断して、この叔母は、宮家の誇りを著しく傷つける行為をし、一門から追放処分につされた女であったと見える。後の宇治十帖にみえる浮舟の母・中将のことなど思つて理解すべき箇所かもしれない。身分違いの恋に落ちた女。このイメージは、今、身分違いの恋に身をやいている明石御方を逆照射する。この意味合いの方が、こは強いと思われる。この巻が、明石の物語の裏打ちとなっている点、何度もうようだが、見逃してはいけない視点である。

【51】叔母の説得は、きわめて常識的で、「かうながらこそ朽ちも失せぬ」という末摘花の、いましがた倒れた門のような依怙地さを際立たせる。乳母子・侍従もついに常識に従い、末摘花を見捨てて叔母に付いてゆくというのだから、末摘花が踏み止まっている世界は、異常・無謀としか言いようがない。もっとも、末摘花は異常のよく似合う女で、この点では終始一貫しているのだけれども。

【52】末摘花が光源氏に望みを託していると見た叔母の言葉は厳しい。「ただ今は式部卿の宮の御女よりほかに心わけたまふかたもなかりけり」という光源氏の現状報告は、世間の常識のありのままの報告である。勝負はすでについているのであって、末摘花の行為は、どうみてもドン・キ・ホーテにはかならない。この叔母の忠告を「げにとおぼす」末摘花もやるせないかぎり。なお、紫上を「式部卿の御女」と言ったのは、語り手の先走りである。この時点で「式部卿の御女」は、朝顔斎院のことである。語り手は、すでに朝顔の父が死亡した以後の地点の意識

で語っているのである。本編の語り手のような厳密さはない。こういうところまで作者が意識して操作しているのかどうか。にわかには断定できない。

【53】「敷原に過ぐしたまへる人」という表現がまた繰り返される。【34】。叔母はよほど、この表現が気に入っているのである。

【54】平安時代の女性は、抜け毛も大事に取つておいたことが分かる。髪にするためである。これで末摘花は「九尺余」の髪を作っていたらしい。これを侍従の饞に与えたのである。

【55】侍従は大貳の甥との恋におち、行く恋人と止まる主人の板挟みとなる。末摘花に北九州行きを勧めて果たせず、結局、恋を選んで西下する。末摘花は光源氏と父の家を選択したわけである。光源氏への信頼感が揺らいでしまった今、侍従との別れは切ない。末摘花は乳母、つまり侍従の母の遺言をもちだしている。遺言を破つてお前に行くのか。源氏物語における遺言の重さを侍従は知らない。おそらく彼女の未来はロクなことではないだろう。と読者は思うかもしれない。

【56】「まま」という乳母の呼称がひどく印象に残る。これは、ほとんど今の「かあちゃん」に相当する語なのではあるまいか。浮舟巻に、乳母を「まま」と呼んでいる例がある。

【57】末摘花巻で歌が詠めなかった彼女も、苦勞と学修で、上手い歌を詠んでいる。この巻の末摘花は、喜劇役者ではない。彼女は立派な一人の女、それも尊敬に値する女性として遇されている。

【58】末摘花と侍従との贈答によって、「玉鬘」という語のイメージを了解することができる。「思ひのほかにかけ離れぬる」と「絶えてもやまじ」である。これは玉鬘巻まで記憶しておく必要がある。

【59】侍従が去って、末摘花の周辺には「世に用ゐらるまじき老人」のみが残る。その老女房として「おのが身々につけたるたよりども思ひ出でて、とまるまじう思」っているというのだから、残酷な設定である。光源氏の到来は、まさに地獄に仏なのである。

【60】「霜月」十一月、越の白山みたいな末摘花の庭の様を簡単に書き、四月まで省略している。冬が過ぎ、春がすぎても、光源氏は訪れなかったわけである。残酷な省略というべきだろう。時が末摘花に止めをさしてしまいそうな展開である。なお、この時期に政権交替がおこなわれる。冷泉帝の即位、光源氏の内大臣就任。致仕の左大臣が摂政太政大臣となる。（澤標巻）。

【61】光源氏は、全く末摘花のことを思い出さなかったわけではない。「その人はまだ世にやおはすらむ」と、ふと思う折もあったのだが、そのうちにとまっているうちに時が経っていったのである。忙しい男が作りがちな、自ずからの罪、不義理である。したがって、経済的援助も忘れたままであったと知れる。酷い話だが、よくありそうな話ではある。しかし、無意識の罪は、かくも残酷な結果を生む。が、何度もういうようだが、末摘花の場合は、結果的に救われるからまだよい。筑紫の五節など、この無意識の罪が現実のものとなる。（幻巻）。

【62】そして四月。花散里を訪問する。前巻を思い出してほしい。あれは五月雨の頃だったから、当然、五月。作者のミスだろうか。途中末摘花を思い出し立ち寄ることとなって、花散里の許には日を改めて行ったのではない。この日、ちゃんと花散里のところへ行っているのである。そういえば、末摘花巻で、あれほど活躍した大輔命婦はどうしたのであるうか。この巻でいっこうに消息が知れない。しかし、この程度のミスにめくじらをたてるのはいかなものか。この巻の語り手は、末摘花の女房たちが想定される。ならば、この巻に描かれたように、語り手もそうとうに鼈碌していて、時間感覚が麻痺しているといふべきであろう。紫上を式部卿の女と言っていたくらいだから。（52）。

【63】「うづき」は「さつき」の間違いかもしれない。「有」と「散」。魯魚の誤りを想定するのは無理か。「日ごろ降りつる名残の雨すこしそそきて」は、梅雨の晴れ間のような気もする。

【64】「おおきなる松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、風につきてさと匂ふ」のが、「橋にかはりてをかしければ」とある。橋をだしたところ、花散里を意識した構成であろうか。光源氏は、昔なつかしい人をふと思ひ出したのだ。

【65】光源氏は、道中、こうして常陸宮邸を思い出し、惟光を差し入れた。その時の光源氏の台詞「ここにありし人は、まだやながむらむ」は、ほとんど「生きているだろうか」に近い。残酷な話である。その頃、末摘花は「昼寝の夢」の中で父・常陸宮を夢見ている。この設定は、光源氏を導き入れたのは、父

宮の靈力だという示唆であろう。末摘花巻にも同様の発想があった。さらにこは、ちょうど桐壺帝の靈が光源氏を明石に誘ったのと同じ構成であることに注意しよう。末摘花の「須磨・明石」はこうして終わる。遺言を守った女の物語は、かくて光源氏同様の帰結をする。末摘花物語も、一族復活の大きなテーマの一環なのである。

【66】この時、末摘花は「昼寝の夢」の父が恋しくて、歌を詠んでいる。亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ。得意の「唐衣」が使われていない。素直な歌である。

【67】惟光と女房のやりとり。光源氏への報告。光源氏の思念。「変わらぬ」ことが強調されている。この巻のテーマである。

惟光の方はリップサービス。女房の方は、まじりつけなしの真実の叫び。この差に光源氏が愕然とするわけである。

【68】女房たちは、この家のことを「浅茅が原」と言っている。叔母の「藪原」との差に注目しよう。女房たちのほうがよほど上品である。

【69】「侍従が叔母の少将」の存在。侍従は去るにあたって後事をこの人に託したものと思われる。侍従の一族も常陸宮一族に深く関与していることが分かる。

【70】光源氏の反省。「今まで訪はざりけるよと、わが御心の情なさもおぼし知らる」。久し振りの帰京。権力への復活。光源氏は近頃、ちょっと舞い上がり、浮かれていたのである。

【71】光源氏は、先ず消息をと思うが、「見たまひしほどの口遅さもまだ変らずは」と考え、自ら藪原に入ってゆく。末摘花巻

の「むむ」の場面などが思い出されよう。「変らず」は、この巻のキーワード。

【72】「御傘さぶらふ」の傘は、雨傘。源氏物語絵巻にも見られる。上は雨、下は露。散々な環境の中を光源氏が行く。彼のなみなみならぬ愛情表現であろう。

【73】「昔だにあるかなきかなりし中門など、まして形もなくなりて」。この前、叔母が倒した門だ。まるで朽ちた斧の柄のようで、時の経過が恐ろしい。まさに神仙的時間の経過である。その中であって、「変わらぬ女の心」。それを作者は描きたかったのだ。

【74】光源氏の突然の来訪に、それまで見向きもしなかった叔母からもらった衣を着る末摘花。まことに可愛そうだが、「背に腹は変えられない」の好例である。「煤けたる御几帳」は昔のままの几帳だろう。

【75】光源氏が末摘花にかけた言葉はあくまで優しい。「年ごろの隔てにも、心ばかりは変わらずなむ、思ひやりきこえつるを、さしもおどろかいたまはぬ恨めしさに、今までこころみきこえつるを、杉ならぬ木立のしるさに、え過ぎでなむ、負けきこえにける」。読者は、この光源氏の嘘をどう見るか。はたして許せるか。末摘花は間違いなく感激しているけれども、相手を仕合わせにする嘘なら許せるか。しかし、「さしもおぼされぬことと、情々しう聞こえなしたまふことどもあり」という厳しい草子地は、読者を光源氏批判へと誘導せずにはおかぬ草子地である。この時、読者は全員、末摘花の味方となる。

【76】末摘花の口遅さは相変わらずであったが、わざわざ數原を分け入ってくれた光源氏の志に「思ひおこしてぞ、ほのかに聞こえ出で」た。彼女の言葉は書かれていない。書かれない方が、「思ひおこして」の気分が出る。そう作者は計算したのでらう。一方、光源氏は、例によって、べらべらとよく喋っている。罪人というものは、とかく饒舌なものである。

【77】光源氏は自分の「変わらぬ心ならひ」を言う。変わらぬのは、光源氏の方ではなく、末摘花の方であること、もはや言うまでもない。光源氏は、何と末摘花によって相対化されているだ。しかし、「都に変わりにけることの多かりけるも、さまざまあはれになむ」と認識する光源氏には、「変わらぬ心」の人・末摘花の価値は痛いほど理解できたものと推察される。このあたりで、読者は、末摘花の強調が、光源氏の政治姿勢を炙りだす効果をねらったものだというところに気づくはずである。政治的転向者に対する光源氏の姿勢は甘くはないのではないかと。

【78】「数ふればこよなう積りぬらむかし」と光源氏は言う。末摘花に初めて逢ってから十二年。須磨に旅立ってから四年の歳月が経っている。

【79】末摘花の言葉は省略され、和歌のみを記す。お泊まりにはならないのですか。甘えた歌に、現在の末摘花の幸せが凝縮している。彼女は満足しているのである。「昔よりはねびまさらたまへるにや」と光源氏も思っている。

【80】「月入り方になりて」「いとはなやかにさし入りたれば」

とある。末摘花邸に露を払いつつ入る時は「雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそげば」とあった。それほどの時間が経過しているとも思われぬのに。ご都合主義的文章であろう。

【81】この巻で、末摘花は三首も歌を詠んでいる。いずれもまっとうなものである。光源氏との贈答も堂にいつている。作者は明らかに、この巻で、末摘花のような変わらぬ人生に価値を与え評価しているのである。世に流されることなく誇り高く生きること、誠実に生きる屈原の人生の評価である。末摘花が花散里と同列に扱われている必然性がここにある。

【82】「昔物語に、塔こぼちたる人もありける」は不審。末摘花が愛読していたという『唐守』『魏姑射の刀自』のなかにあった話であろうか。後考に備えたい。

【83】「ひたぶるにものづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなる」。光源氏の末摘花評価。彼女のつつましさ、末摘花をしてようやく喜劇から悲劇にした瞬間である。

【84】光源氏の反省。「年ごろさまざまの思ひにほればしめて、隔てつるほど、つらしと思はれつらむといとほしくおぼす」。末摘花は、その愚直な処世でもって、光源氏に人としての何かを教えたのである。

【85】花散里であるが、光源氏が末摘花を経由したことによって、欠点が目立たなかった由である。彼女が、相当の醜女であることは、少女巻までゆかぬと分らないのだが、作者は、それをここで、さりげなくそれを示唆している。

【86】時は「祭、御禊などのほど」。光源氏クラスになると、何

かにつけて、もらいものが多い。そのもらいものは、世話をしている人々に配る。いわゆる「たらいまわし」である。

【87】今、祭りの頃といえ、四月。したがって、この光源氏訪問記事は五月ではなく、四月ということになる。【63】の魯魚の誤り説は撤回しなければならぬ。

【88】末摘花邸の崩れた築地の応急処置として「板垣」をめぐらした。という記事はおもしろい。まるで、土地を差し押さえた不動産屋みたいではないか。ままよ、光源氏は、花散里に須磨でしたことを、京都で末摘花にしているわけである。

【89】「かう尋ね出でたまへりと聞き伝へむにつけても、わが御ため面目なければ、わたりたまふことはなし」。冷たい文章が、そっと挿入されている。末摘花に関わるということは光源氏にとって面目ない行為なのだという視点である。世間は末摘花の醜悪さを知らないだろうに。ここは、読者に対して面目ない、と言っているようなのが可笑しい。紫式部の時代は、物語と現実がさほど乖離していなかったもので、こういう言い方にも一定の説得力があったものと思われる。

【90】末摘花はどうやら二条東院に引き取られるようである。花散里そして明石の女。彼女たちは、この段階で同列のものとして取り扱われている。(澤標巻)。末摘花は、この巻で、最高に遇されていて、以後、このように遇されることはなくなる。これも残酷だが、冷たい現実である。

【91】六条院は、ひよっとして、東院に末摘花が収容される羽目になったため、急遽構想されたのではないか、とも考えられ

る。

【92】「おしなべたる世の常の人をば目とどめ耳たてたまはず」という光源氏が、人並みとはとても思えない末摘花の、こうした破格の待遇は、どういう光源氏の心から発したものなのか。語り手も思案投げ首で「これも昔の契りなめりかし」という古風な解釈でもって投げ出している。後は読者次第ということか。昔の契りの「昔」を、前世というのではなく、常陸宮が現役であった時代のことだと仮定すると、末摘花の構想がみえてくるのではないかと私は思う。これも、明石一族の話と同様、昔の勢力の復活劇なのである。

【93】光源氏が大切にしている人だと分かったら、掌を返したように追従する世間の人々の様子が、冷笑的に描かれている。すぐに変わる人と変わらぬ人。末摘花は、その変わらぬ人の劇的な例である。こういう人はめったにいない。価値のある生きざまなのだ、ということである。

【94】秋に行われた光源氏の豪華な住吉詣での記事は省略されている。末摘花には関係のない話だからである。

【95】二年後、末摘花は東院に入る。彼女の幸福の成就、人生の帰結である。帰京した叔母と侍従は、運命の激変に驚嘆したことであろう。というあたりは、作者得意の省略で逃けている。「今すこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたう、うるさく、もの憂ければなむ。今またもついであらむをりに、思ひ出でてなむ聞こゆべきとぞ」という口上は、まったく帚木三帖の語り手と同じである。本編とはだいぶ発想の違う下品で露骨

な話をしてやったわい、といったところであろう。

【96】この「問はず語り」という語は、惟光の応対に出た「侍従が叔母の少将といひはべりし老人」を思わせ、この巻は、彼女が語っているのではないかと想像させる語句である。

関屋 巻

【1】空蟬の後日譚である。前巻同様、いまさらなにを、の感なきにしもあらずである。しかし、この逢生・関屋の二つの巻の存在は、読者を強引に古い世界に引き戻す作用がある。光源氏の現在を手放しの礼賛で見ず、過去との二重写しのなかで批判的に眺める。そういう作者の意図が汲み取れるように思う。

【2】『延喜式』によれば、伊予国は上国。常陸国は大国である。伊予の介であった男が常陸の介になった。空蟬の夫は間違いない出世している。常陸介に就任したのは、「故院かくれさせたまひてまたの年」とあるから、賢木巻の頃。光源氏の暗黒時代。須磨に行こうかどうかと、光源氏が逡巡していた頃である。この頃、彼は出世している。これはどうしたことか。帚木・空蟬・夕顔、それぞれの巻の、いずれから判断しても、彼は光源氏が意のままに操れる光源氏の走狗的存在であった。だとすれば、彼は、須磨についていった惟光や良清とは違い、具合が悪くなると、掌を返したようになる世間の人の中の一人になってしまったのだということになる。(逢生巻)。いや、彼の場合、そんな甘いものではない。彼の場合は、もっと悪質で、光源氏

の反対勢力に積極果敢に阿諛追従、尻尾を振らなければ、この上国から大国への出世などありえない。といったようなことを、作者は冒頭の「常陸になりて下りしかば」という一文にさりげなく塗り込めているのである。彼の変質、転向は何故か。名利のためか。それとも、なにか別のもののためなのか。もう少し読みこんでみる必要がある。

【3】「常陸介」には侮蔑の意味合いがあると思う。『枕草子』八十三段に、「常陸介と寝む」という俗語が紹介されている。遠く東屋巻では、常陸介の田舎ぶりが強調されているし、でっぷりと肥った浮舟の母を「常陸殿」と呼んでいる。なお、前巻に末摘花が登場し、常陸宮のイメージからの心理的連続性も注意されるところである。

【4】この巻で空蟬が「帚木」と呼ばれるのも、注目点の一つである。「帚木」のイメージは藤壺のイメージであった。このイメージは、この巻の後半部で生かされると思う。

【5】遠く離れたことで、光源氏とは自動的に疎遠になった女。近くにいても疎遠であった前巻の末摘花との対照という設定は、さほど重要なものではない。伊勢に去った六条御息所。それよりさらに遠ざかった空蟬、という位置関係も、形を整えるためだけのことと思われる。が、心理的なバランスは考慮されていると考えられる。

【6】「筑波嶺の山を吹き越す風も浮きたるこちして」とは、どういう心地か。光源氏を裏切ってここに来たという心地が含まれていると考えるのはいかが。「きみをおきてあだし心をわ

が持たば末の松山浪もこえなむ」(古今集卷第二十東歌)。

【7】「限れることもなかりし御旅居なれど」は光源氏のこと。常陸介のことではない。この後に「許されて」と補えばよい。文脈からいうと、一瞬常陸介のことかと思うが、「御」があるので、無理。しかも、常陸介には任期がある。

【8】光源氏復活の翌年、空蟬とその夫は帰京している。任期満了であろうけれど、なにやら解任の気配がないでもない。裏切り者である空蟬の夫には、もはや任官の可能性は皆無であろう。この空蟬一行と光源氏の行列が、逢坂関で出会うというのも、意味深長である。光源氏と空蟬とは逢坂山を越えた仲であつたからである。この出会い、ひよっとすると光源氏の、厭味からでた行為であるとするのは考えすぎか。「関入る日しも」の「しも」は単なる偶然という意味だけだろうか。

【9】『延喜式』によれば、常陸から京都までの行程は、上り三十日、下り十五日である。

【10】石山寺へのお礼参り。濡標巻の住吉詣と同工である。石山観音への祈りの記事が、須磨・明石両巻には特に見えない。このことも、この巻をとってつけた印象にする原因である。確かに、この巻はわざとらしく厭味でもある。光源氏の、世の中に対する今の心境を語ったまでであらうか。

【11】「かの紀伊の守などいい子ども」という言い方も、完全に掃木巻を意識したもので、昔おべんちゃんらを言っていた奴という印象が強い。

【12】「迎へに来たる人々」とあるところから分かるように、京

都から逢坂山の関所まで迎えにきたらしい。見送りも、ここまできたと推察される。蟬丸の歌の通りである。これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関。こは、別れた女との出会いの場所としては、恰好の場所である。

【13】「殿は栗田山越えたまひぬとて、御前の人々、道もさりあへず来こみぬれば、関山に皆下りゐて」から判断して、光源氏の行列の、信じられぬ長さが理解されよう。およそ五、六キロはゆうにある。もって、光源氏の現在の威勢の程が察せられる。もっとも、「御前の人々」とは、先発隊の人々の意味かもしれない。それにしても「道もさりあへず」というのだから、物凄

い人数だと知れる。

【14】数知れぬ光源氏の供人たちが「皆目とどめ」るほどに、光源氏一行をひかえて見送る空蟬一行も豪勢である。牛車は十台。「田舎びず、よしありて、斎宮の御下りなにぞやうのをりの物見車」めいていたという。世の通例に従い、東国で搾取の限りをつくしたのであらうか。今では、空蟬は、おしもおされもしない受領の妻なのだ。あの、末摘花の叔母のように。と考えると、前巻の叔母の設定が生かされていることが理解できようというものだ。

【15】時は、「九月晦日」。秋の終わりである。そういえば、夕顔巻で、空蟬の塩なれ衣を返したのも、秋の終わりであった。あれが、空蟬との別れであった。今回、これはその駄目押し、ということになるのか。

【16】「括り染め」は「紅葉の色」の縁語と了解しておくとい

この場面は、昔の話という発想だから「神代も聞かず龍田川」を響かしているわけだ。

【17】紀伊の守、小君。懐かしい名前だ。空蟬巻の時点から十二年経過している。小君を使って「今日の御関迎へは、え思ひ捨てたまはじ」と空蟬に伝言する光源氏の演出もちょっと厭味だが、なかなかよい。光源氏は、この台詞を言いたくて、わざわざこの日ここにやってきたのではないか。

【18】「人知れず昔のこと忘れ」ないでいる空蟬の胸中もあはれである。彼女は、断じて末摘花の叔母ではない。(14)。昔のままの彼女なのである。独詠を見よ。「行くと来とせきとめがたき涙」は残酷な月日への未練と悔恨がこめられている。時は流れ、昔は帰らない。そうと知りながら、その認識に殉じえない女。「絶えぬ清水」は、昔のままの彼女の象徴である。しかし、その思いは厭味な中年男に成り下がった光源氏にはとても届きそうにない。「え知りたまはじかしと思ふに、いとかひなし」である。そう、ここは淡海。貝はないのだ、としゃれているのも切ない話である。

【19】空蟬の独詠歌「行くと来」に、日の出の勢いの光源氏と、落日の空蟬とその夫の暗示を読み取るのは、いかが。

【20】石山寺参詣場面の省略。この巻が、落標巻のような、御礼参りを書くためにあるのではないことを示している。空蟬の周辺への意識の集中、これが目的である。

【21】「石山より出でたまふ御迎へに衛門の佐参れり」。昔の小君は、光源氏のお迎えに、逢坂関までやって来たらしい。

【12】。早速に尻尾を振る犬めいて、わざとらしく嫌らしい。こんなことで、過去の罪が拭かれるものでもなからうに。が、彼のこの行為、一定の効果はあったらしい。光源氏の空蟬への未練心のお蔭である。

【22】その小君の描写。「爵など得しまで」光源氏にあんなに世話になりながら、彼の不遇時代になると、「ものの聞こえに憚り、父と行動を共にした男。紀伊の守にしても、河内守になっているのだから、小君と選ぶところはない。『延喜式』に照らせば、紀伊国は上国、河内国は大国である。光源氏の暗黒時代に、紀伊守も出世している。伊予一族の、弘徽殿大后方への阿諛追従ぶりが、目に浮かぶようである。(2)。光源氏は、このことを「すこし心置きて年ごろはおぼしけれど、色にも出だしたまはず」という態度をとっている。色に出さずとも、しかるべく処置をしているに違いない。空蟬方も、そのことは充分承知しているものと思われる。この巻は、言わず語らず、非常に政治的な巻である。

【23】光源氏の数少ない須磨への同道者。その中に右近将監がいた。その右近将監が、この常陸介の子、河内守の弟であったことが、初めてここで明らかにされる。この記事でもって、これまでのわれわれの想像が一举に事実として確定する。右近将監は父と行動をともにしなかったのだ。復活した光源氏は、この右近将監を「とりわきてなし出で」た。破格の出世である。この右近将監の、忠勤評価の対極に、常陸介・河内守・衛門佐(小君)がいる。という絵柄がここに成立する。彼らの後悔

「などてすこしも世に従ふ心をつかひけむ」。作者がこの巻を書いた目的の大半はこれであろう。「世に従ふ心をつか」った人々の様を記す。前巻から、この姿勢は終始一貫している。

【24】いまだに空蟬を忘れない光源氏を衛門佐は思う。「心長くもおはするかな」。この批評、己に返ってくる言葉だろう。彼らは「心短く」、世に従い今日後悔しているのである。

【25】光源氏の空蟬への言葉は優しい。勝者の余裕だろうか。

末摘花への言葉に似ている。この「ただ今のこちする」という光源氏の言葉、空蟬の心に真っ直ぐに届いたようである。たまたま返歌した空蟬の行為も自然だし、以後二人の間に文通が復活したのも、もっともな話であろう。「絶えぬ清水」のような空蟬の、変わらぬ心の評価であろう。【18】。

【26】「関守の、さもうらやましく、めざましかりしかな」。常陸介は空蟬の関守。よい譬えではないか。

【27】手紙を取りついた小君の言葉「昔にはすこしおぼしのことあらむと思ひたまふるに」には、光源氏を裏切ったものの忸怩たる思いがある。もう昔は返ってこない、自分の未来には何の希望はないはずである。しかし、光源氏の態度は変化がない。「同じやうなる御心のなつかしきなむ、いとどありがたき」。これは、小君の甘さ、希望的観測にすぎないのではないか。光源氏は、小君のことなど問題にしていない。問題にしていないから小君には優しく見えるのだ。小君の出世は望むべくもあるまい。

【28】小君が、空蟬に与えたアドバイス。「女にては負けきこえ

たまへらむに、罪ゆるされぬべし」は、いかにも卑しい。空蟬をだしにして己の出世を考えている姿が見え見えである。こういう男が、「世に従ふ心をつか」うのである。という作者の言葉が聞こえてきそうだ。

【29】光源氏にとって空蟬はやはり、忘れたい思い出の女性であつたらしい。空蟬の返歌「夢のやうになむ」から、交際が復活している。

【30】「関守」常陸介の死。【26】。帚木巻の時点で老人であつたのだから、「老のつもり」の自然死というべきだろう。しかし、子供たちにただひたすら空蟬を頼むという彼の遺言は迫力がある。「いかでか、この人の御ために残し置く魂もがな」という伊予介の思念を前にして、読者は、彼の人生がほとんど空蟬のためにのみあつたことに気付くにちがいない。そういえば、空蟬はその登場の初めから、伊予介に「私物」に思われているという紀伊守の証言があつた。さすれば、あの当時の愛情を、死の瞬間まで常陸介は持ち続けていたことになる。空蟬は、自分が一番愛した人ではなかったけれど、自分を一番愛してくれた人の側にいたのである。このあたり、ちょっと臘月夜に似ていなくもない。光源氏に対する伊予介の背信行為は、空蟬にたいする彼の絶対愛の観点から充分に解釈できると私は思う。光源氏に殉じて経済的に破綻することは、空蟬のために断然避けねばならない。それよりも何よりも、彼は光源氏の魔手から空蟬を護ることこそ自分の使命だと考えていたのではないか。彼は、光源氏と空蟬の一件を、先刻承知していたにちがいないと

私は思う。伊予介は、己の出世のために、命懸けで愛している妻・空蟬を人身御供とする、そういう人生を彼は断固拒否したのである。そして彼は光源氏を裏切り、弘徽殿大后方に転向した。そう考えておくべきではないか。〔2〕。

【31】空蟬の心情。「心憂き宿世」に含まれるもの。入内の挫折。伊予介との結婚。光源氏との出会い。そして今、常陸介の死。

「いかなるさまにはふれまどふべきにか」は、常陸介との小さな幸せが破れて、また同じ人生に見舞われる予感に震える心情であろう。

【32】夫の死後、義理の息子・河内守に言い寄られて出家する空蟬。作者が、この巻で彼女を尋木と呼んだ理由がここで明らかになる。空蟬は、最後に藤壺のイメージをちらつかせてスツといなくなるのである。作者の饒であろう。〔4〕。しかし、空蟬の夢。娘時代に光源氏に逢いたかった、桐壺更衣のような身の上になるはずだったのだという彼女の夢は、今や明石の女や紫上によって実現されているのであるから、このあたりが潮時。身の引き際というものだろう。作者としては、明石の女や紫上の人生が、古い登場人物たちの見果てぬ夢の延長上にあるのだということを、読者に忘れてもらいたくなかった。だからこそ、末摘花や空蟬という道草を、このあたりで読者にわざわざ提供したのだと思う。

【33】ここでは描かれてはいないけれど、初音巻によれば、空蟬は光源氏に引き取られ、東院で、末摘花とともに生涯を過ごす。読者には十分に納得できる設定だと思う。「絶えぬ清水」

の空蟬は、小さな幸せでもって、人生を全うさせられる。もって瞑すべきといふべきか。

絵 合 巻

【1】「前斎宮の御参りのこと」という冒頭の一文は、この巻が前の二巻を飛び越えて濡標巻に接続することを示している。濡標巻末は、光源氏と藤壺との、額を寄せ合った政治的談合の、露骨な場面であった。この巻は、その二人の談合の結果が具体的に展開されるということだろう。

【2】蓬生・関屋の両巻は、「変わらぬ心」のテーマでもって、この巻を裏打ち補強することが、予想される。

【3】藤壺は「中宮」と呼ばれている。「入道」のイメージが、最初から払拭されていることに注目しよう。藤壺は、まだ現役なのだ。前斎宮入内の件は、藤壺が表にたって、藤壺の意思でおこなわれるという形にしたらしい。これも、二人の談合の結果である。

【4】光源氏は「大殿」と呼ばれる。もはや青年のイメージは遠く、かつての左大臣の権力者の風貌がこの呼称に歴然としている。

【5】朱雀院への遠慮から光源氏は裏方に徹している。当初考えていた前斎宮を二条院に引き取り、自分の養女として入内させるの止め、「ただ知らず顔にもてなし」ている。光源氏の、この巻における朱雀院への態度は、心の鬼・良心の呵責と言う

べきだろうと一応は考えられる。しかし、これが光源氏の政治なのだという冷たい見方も可能である。彼としては、朱雀院の主導になる自分の復活劇に対して、恩を仇で返すような振る舞いには忤怩たる思いがあったことは事実だろう。子宝に恵まれず、その分余裕に乏しい後宮政治家として、やむをえずこうせざるを得ないのだという光源氏の苦しみ。それは理解できる。しかし、これを、善良で率直な朱雀院との対比のなかで書くことによって、光源氏の行為が、冷徹な政治の様相を必要以上に帯びるというのも事実である。

【6】朱雀院が、斎宮入内当日、これみよがしの贈り物をする場面。光源氏の目を充分に意識した「わざとがまし」さ。朱雀院のせめてもの抵抗。蠅螂の斧である。

【7】朱雀院は前斎宮に「くさぐさの御薫物ども」を贈っている。嫁入り道具として、薫物が必須のものであったことは、後の明石姫君の入内の準備を記した梅枝巻であきらかである。また、草子も持参することも、逆ではあるが、この巻の理解の参考になる。この前斎宮入内は、近い将来の明石姫君入内への係ぎ、前座という位置取りであろう。

【8】光源氏は、朱雀院の身になって反省している。「われになりて心動くべきふしかな」。本来結婚すべきだと思って待っていた相手が意外な結婚をする。薫にあぶらげをさらわれた朱雀院の心境を光源氏は痛いほど了解している。この条は、二巻おいて朝顔巻に響くものと思われる。そこで、光源氏は、帰ってきた斎院と結婚できない。光源氏の朱雀院体験である。もっと

も朝顔は誰のものにもならなかったけれども。

【9】「違ひめ」。自分の思うようにならなかったことを「違ひめ」という。この言葉、源氏物語では秘密の匂いのする言葉である。藤壺のこと、そして、昔の明石一族のこと。（若菜巻）

【10】この朱雀院の苦渋は、これが最初のものでないことを理解すべきである。桐壺巻における、光源氏と葵上の結婚のことだ。葵上は、自分と結婚すべき女性であると、かつて朱雀院は考えていたのではなかったか。弘徽殿太后がそう考えていたように、である。（賢木巻）。そして臘月夜的一件。ならば、前斎宮入内は、三度目の苦渋ということになる。そして、遠く若菜巻で、朱雀院は四度目の苦渋をなめることになる。

【11】光源氏の、朱雀院の意思を無視した行為は、やむをえぬ政治的行為であったのだが、彼の胸のうちは須磨のことが掠めたという点を作者はさりげなく書いてある。「つらしとも思ひきこえしかど」である。光源氏にとっては、自分の行為をこういう形で理解されることは、実に不本意にはちがいない。しかし、彼以外の人の判断は、まさしくここに集約されるのはいたしかたのないことであろう。となると、斎宮の結婚強行は、朱雀院への意趣返し、須磨の仇を京で討つという図柄を世に示すという政治的意図から発せられているのではないか。だからこそ、この巻の最後に須磨の絵を出すという芝居があった政治が抜群の効果をはきするのである。朱雀院の描写は、その第一段階。そういう文脈の中で、この条は理解すべきものと思われる。（5）。

【12】光源氏帰還のためにあれほど努力してくれた朱雀院に対してさえ、須磨がちらつくということをここで書いておく。この効果は相当のものだと思う。朱雀院以外の人々に対する光源氏の態度は推して知るべし、である。政界において、今や須磨は絶対の禁句という雰囲気であったはずである。このあたりで、前巻で充分に予想された常陸介の裏切りの一件などが生じてくるというべきだろう。

【13】前斎宮は、伊勢へ旅立った日のことを回想している。大極殿での別れ。朱雀院の「いとなまめき、きよらにて、いみじう泣きたまひし御さま」を思い出している。こう書くと、前斎宮が王昭君のイメージに見えてくる。後に、王昭君の絵に言及する箇所があるが、ここに反響する仕掛けなのではないか。

【14】「別るとではるかに言ひし一言もかへりてものは今ぞ悲しき」。朱雀院に対して斎宮は、けっして悪い感情を抱いていない。むしろ相思相愛なのだというのを、作者はにじむように書いている。斎宮は、朱雀院への返歌を光源氏に見せていない。せめてもの斎宮の抵抗ではないか。【6】。

【15】光源氏とて、このことは充分に承知している。朱雀院と斎宮とは「よき御あはひ」であり、「内裏はまだいといはけなくおはします」のだから、この入内は暴挙。強引に強行されたものであることは論をまたない。ちなみに、この時、冷泉帝は十三歳、朱雀院は三十四歳。前斎宮は二十二歳である。前斎宮今回の入内については、当の本人である斎宮が「人知れず、ものしとおぼすらむ」と光源氏も推察している。光源氏が、い

つのまにか、葵上の意思を無視して彼女を光源氏におしつけた左大臣や、臘月夜を尚侍にした右大臣になっていることを、読者は否応なしに知ることになる。この巻で、光源氏は人情を踏みにじる、限り無く悪役に近い存在とは思わぬか。政治家光源氏。

【16】「むつまじうおぼす修理の宰相」とは誰のことか。惟光のことだろうか。しかし、惟光は後に宰相にはなるが、少女巻で摂津守で左京大夫。無理な比定である。修理大夫を押さえているところ、これからの光源氏の邸宅造営になにかと都合がよかったのではないか。

【17】光源氏は六条御息所を回想する。「あはれ、おはせましかば、いかにかひありておぼしいたづかまし」。斎宮入内は、六条御息所の見果てぬ夢の続きである。斎宮が朱雀院と結婚したら、御息所の夢は実現しない。中宮にも国母にもなれぬからである。光源氏は、このことも意識して、この結婚を強行したのもと思われる。

【18】「おほかたの世につけては、惜しうあたらしかりし人の御ありさま」。六条御息所は遠距離美人。「さこそえあらぬものなれ、よしありしかたはなほすぐれて」。他人の関係であつたら、最高の人である。この光源氏の発想は、朝顔の造型に生かされている。もともと朝顔は、六条御息所の人生を見て、自己の人生を決定した人であつたのだから当然の帰結であるが。（葵巻）。

【19】藤壺が「中宮」と再び呼ばれる。（3）。彼女は入道皇太后であるはずであるが、どうしてこう呼ばれているのか。こ

ういう呼称が可能かどうか。中宮は一旦任命されたら、次の中宮が出現するまで中宮でありつづける。冷泉院の中宮・昌子内親王が、次の花山天皇時代になっても依然として中宮で、兼通の娘が中宮になってはじめて皇太后宮となったという『栄華物語』の記事が参考になる。(巻二「花山たづぬる中納言」)。

心理的にいえば、東宮の保護という目的を果たした今、彼女は入道である必要は全くない。これは、返ってきた栄耀栄華の日々の中で、藤壺が女の最高の地位にあることを示す実質的呼称と言えよう。現役感覚、である。光源氏の「大殿」の呼称と同じ発想ではないか。あるいは堂々と還俗したのか。まさか、そこまではすまいと思われるけれども。

【20】帝は現在十三歳。斎宮女御は二十二歳ほど。およそ十歳の差がある結婚は、たしかに異常である。その昔、光源氏と六条御息所との関係を彷彿させる。斎宮は、今まさに母の道を歩まされているというべきであろうか。

【21】帝の幼さが、摂関政治の要件である。この巻は、摂関政治の実体を露骨に描く意味あい強い。幼い帝が、光源氏をはばかり、自分の意思をまげて「御宿直などはひとしく」するなど、哀れである。光源氏の子とは思えない振る舞いである。帝の性格は、夕霧と同じように設定されている。現在のところ、帝は、年齢もさして変わらぬ権中納言の女・弘徽殿女御に親しみを感じているのは自然である。

【22】権中納言は、弘徽殿女御に将来の中宮を期待している。藤原氏として当然の政治である。今回、斎宮女御の出現は、彼

にとつては脅威であろう。光源氏と権中納言の政治的対決が、これからの見物となろう。それにしても、光源氏は内大臣、彼は権中納言。かなり差がついていることが分かる。

【23】朱雀院は斎宮の胸の内を確認している。「かの櫛の宮の御返り御覽ぜしにつけても、御心離れがたかりけり」。(14)。

【24】光源氏が朱雀院を訪問する場面。朱雀院は以前にも、「斎宮の下りたまひしこと」を光源氏に言い、自分の気持ちを光源氏に述べていることが確認される。それなのに、光源氏は。という気持ちがよく分かる条である。当然、朱雀院の胸の内を察して、光源氏は心苦しく思う。この光源氏の負い目を、こうして書いておくと、若菜巻で、女三宮を引き受ける場面が生きてくる。作者の狙いもそこにあるのだと思う。

【25】光源氏はまだ斎宮女御の顔を見ていない。女御の慎み深さで、その機会を得ていないのである。朱雀院は、斎宮下向の別れの場面で見ている。見ているからこそ、ここまでこだわるのである。「めでたしと思はしみにける御容貌」。斎宮女御は、相当の美人であったと想像される。六条御息所に似ていたのだから。

【26】濡標巻末につづいて兵部卿の宮のことを点描する。姫君入内について、彼は、帝の成長に期待をかけて待つ戦略を採用したわけだ。彼は、須磨の頃の紫上に対する態度によって、光源氏に冷遇されている。しかし、帝の伯父であることは厳然たる事実であって、光源氏が帝の父であるという事実が絶対秘密である以上、現在の光源氏の栄華が理不尽なものであるという

観点に立ちうる唯一の人物である。彼の戦略は自然なものといえる。また、兵部卿の姫君は、かなりの美人であると予測できる。あるいは、紫上に似ているのではないか。この姫君の入内が実現すれば、後宮政治は俄然面白くなるような気がしないか。こういうさりげない記述でもって物語の奥で進行する王朝政治を垣間見させるところが、源氏物語の懐の深さであろう。

【27】絵合は、光源氏と権中納言との政争の優美な表現である。「隙間なくて二所さぶら」ふ二人の女御の後見達の、権力闘争を象徴する。

【28】「上は、よろづのことにすぐれて絵を興あるものにおぼしたり」とあり、この絵合の最終場面で、光源氏の絵の腕前が強調される。ということは、光源氏と帝との血脈の強調だと見て取れよう。この巻の、陰の主題は、まさにこれだろう。絶対秘密の父と子。

【29】斎宮女御は絵が上手かった。絵を介して帝の心が斎宮女御方に動く。権大納言方は当然、焦る。この巻の絵合は、権大納言方の焦燥感の中で推移するものと予測される。急いては事をし損じる、という話かもしれない。

【30】『源氏物語』以前における、平安時代の有名な絵師について述べれば。文徳天皇の頃の百済川成。彼は迷い子になった従者を似顔絵で捜させたり、飛驒の匠とその技を競ったりしている。宇多・醍醐時代の巨勢金岡。彼が描いた馬は夜々草を食いに田に出たという。村上天皇の頃、純友の首の絵をかいて天覧に供した掃守在上。一条天皇時代には、地獄変の絵をかいて命

を縮めた巨勢広高。なかなか絵の盛んな時世であった。粟田関白・藤原道兼も、障子の絵に諸国の名所を描かせ、絵物語を描かせ、かつ蒐集していた。『栄華物語』巻三。これは、この権中納言的である。意識した操作なのかもしれない。

【31】権中納言の性格描写。「あくまでかどかどしく今めきたまへる御心」。彼は未来志向。逆に光源氏は過去志向といえようか。後に「梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑある限り、弘徽殿は、そのころ世にめづらしく、をかき限りを選び描かせたまへば」とあるのは、二人の性格に対応している。

【32】物語絵は、「例の月次の絵」と対比的に表現されていることから判断して、物語の流行にともない当今盛んになったものであったと思われる。当然、権中納言が力をいれてしかるべき領域である。「月次の絵」は、古今和歌集四季の部を絵にしたようなものと、年中行事絵巻的なものとの総称であろう。絵といえ、これが普通であった。屏風絵が盛んであったことは、その古今集の詞書から充分うかがえる。この屏風歌から自然な感覚で物語絵が発生したものとすいさつされる。歌物語から本格的物語が発生したように。

【33】光源氏が「古代の御絵」に力を入れるのは当然として、この、「古代」とは、どのあたりをさしているのであろうか。おそらく物語絵流行以前の唐絵、「長恨歌、王昭君などやうなる絵」のことだろう。一世代前の、光源氏の母なる時代の文化遺産ではないか。桐壺巻で、亡き桐壺更衣をしのんで桐壺帝が見ていた絵、あれも今、光源氏の手元に残されてあるのではな

かるうか。長恨歌や王昭君のような王朝うけする面白いものは、いちはやく唐物語として翻訳翻案され、それに絵をつけて鑑賞されていたものと想像される。

【34】長恨歌はともかく、王昭君に言及しているところ、意味深長である。王昭君は絵で失敗し、かの地へ赴く羽目になった。別れは、この巻で強調された現在の朱雀院のやるせない思いに抵触する。王昭君を避けたのは、光源氏の遠慮の一環かと思われる。前斎宮に王昭君のイメージがあることについてはすでに触れた。(13)。

【35】光源氏と一緒に絵をととのえる紫上の描写。政治家の妻の姿に彼女もなっていることが見てとれよう。

【36】「かの旅の御日記の箱」。須磨・明石で光源氏が書いた日記と絵をいれた箱である。(明石巻)。今、これを光源氏は紫上に見せている。「箱」とあるから、これは、巻物ではなく、冊子であったと予想される。後に「一帖づつ」とある。箱は現在の文庫のようなものと推量される。源氏物語絵も、そのように描かれている。

【37】「忘れがたく、その世の夢をおぼしますをりなき御心ども」。これは、紫上と光源氏の共通認識。二人の夫婦としての真の結合が、須磨・明石の別れによってなされている証拠であろう。まして、この絵は、光源氏の紫上に対する愛の表明であったのだから。ところで、あのとき、京都で紫上は、同じく日記を書いていた。あの日記はどうなっていたのか。彼女は、自分の日記を光源氏に見せる気はないらしい。

【38】須磨・明石の絵日記は、この紫上のほかには「中宮ばかりには、見せたてまつるべきもの」だという記述。これで、光源氏・紫上・藤壺の結合が完了し、藤壺から紫上への移行もここに成就したと見るべきである。

【39】そして、「かの明石の家居ぞ、まづいかにとおぼしやらぬ時の間なき」というように光源氏の心理が明石に流れる。大きく見れば、この巻で、最後の須磨の絵によって須磨・明石を強調すればするほど、この巻が明石御方と姫君が上洛する前奏曲としての意味・機能がたかまることに気づこう。この発想は、この豪華な巻を、明石姫君登場の前座となしてしまふ。このあたりで、明石一族に賭ける作者の情熱の広大無辺さに、読者は今更ながら気づくことになるだろう。

【40】「権中納言いど心を尽くして、軸、表紙、紐のかざり、いよいよととのへたまふ」とある。これは、明らかに巻物、卷子本である。この絵合の物語絵は、巻物、冊子の両様であったことが分かる。(36)。

【41】時は、三月十日。この時は、濡標の巻の時点の翌々年である。濡標巻の秋に御息所が死亡したのであるから、前斎宮の入内を翌年の春にもつてくることはできない。(『令義解』九。喪葬)によれば、母の喪は一年である。この間、結婚など論外であるから、濡標巻巻末から約一年数カ月の空白がおかれていることになる。この間、光源氏の政治的勢力は、上昇の一途をたどったはずで、現在は、当たるべからざる勢いにあった、と考えておいた方が、この巻の理解のためにはよいだろう。光源

氏は大臣で、かつての頭中将は權中納言。二人の差も相当に拡がっている。(22)。

【42】梅壺の御方(斎宮女御)と弘徽殿女御の対照。梅壺は「いにしへの物語、名高くゆゑある限り」、弘徽殿は「そのころ世にめづらしく、をかき限り」の絵を集め描かせる。見た目のはなやかさから、弘徽殿方が優勢である。光源氏方の勝利は逆転勝利。だから劇的なのだ。

【43】絵合は、二度行われている。中宮お御前。そして天覧。

【44】藤壺のことを作者は徹底して「中宮」と書く。「御行ひもおこたりつつ御覧ず」とあるから、彼女が入道の身であることを作者が忘れてゐるわけではない。(19)。しかし、現在の光源氏および藤壺の威勢は、彼女を入道と呼ぶことをためらわせるものであった。ということであろう。「中宮も参らせたまへるころ」とあって、この時、中宮は宮中にいたことは分かる。が、どこにいたのであらうか。藤壺か。藤壺には、朱雀帝時代は、女三宮の母がいたはずである。(若菜巻)。

【45】左方と右方とに分かれたのは、歌合に準じたやり方である。

【46】竹取物語を「物語の出で来はじめの祖」といったのは、単に竹取物語が一番古い作品という意味ではなく、ちょうどバツハが音楽の父というのと同じ伝で、近代文学の祖型といったような意味であったと考えられる。なお、近代文学の最高峰はこの源氏物語であるという遠近法はしっかり理解しておいたほうがよい。なぜなら、かぐや姫のことを「この世の濁りにもけが

れず、はるかに思ひのぼる契り高く」と評しているのは、紫上や光源氏に対する批評に通じるであらうし、「あさはかなる女、目及ばぬならむかし」という読者意識も、そのまま源氏物語の内容を指している言葉であらうと思われるからである。

【47】宇津保物語と正三位が現代文学であった。ということとは、時代設定が村上天皇の頃ということが提示されているわけだ。

「絵は常則、手は道風」も、常則はともかく小野道風は村上時代の花形であるから、これと矛盾しない。竹取物語絵巻の「絵は巨勢相覧、手は紀の貫之」は、相覧はよく分からないが、貫之の存在でもって、宇多・醍醐時代。竹取物語は宇津保物語や正三位より一世代前の文学であるという設定であることが分かる。

【48】宇津保物語の評価。俊蔭の、苦勞の末の名譽論をいっているのは、これは、この時点での光源氏論でもあらうから、評価されて当然といったところであらう。

【49】「紫檀の軸」や「黄なる玉の軸」とある。絵物語は、巻物仕立てになっていることが分かる。(40)。

【50】「世の常のあだごとのひきつくるひ飾れる」は正三位への批評だが、当時の物語のレベルはこんなものだという作者の生の声のような気がする。写実を基調とし、「あだごと」に興味を示す現代小説批判、といったところであらうか。源氏物語は「世の常ならぬ」世界を描く物語であるから、『竹取物語』の子孫なのだという思念の流れを理解すべきである。(46)。

【51】「伊勢の海の深き心をたどらずてふりにし跡と波や消つべ

き。古いものは駄目という風潮が、当時もあったと見える。源氏物語も、伊勢物語と同様、「深き心」をもった物語なのだという主張は十分に理解できよう。

【52】伊勢物語への盲目的評価。「業平が名をや朽すべき」「在五中将の名をば、え朽さじ」「伊勢をの海土の名をや沈めむ」。特に、藤壺が強く主張している点を見逃すべきではない。これは、彼女の光源氏への間接的な愛の告白であろう。源氏物語における光源氏と藤壺の関係の絶対的評価を、ここで強調しているのだとも考えられる。伊勢物語を否定すれば、源氏物語は無いということを作者はここで特筆大書していると読むべきではないか。ここに、業平像は光源氏像に吸収される印象が強い。

【53】また、伊勢の強調は、伊勢前斎宮の評価にも通じ、ここは譲れないという意味もある。このあたりの文学論は、きわめて中国文学的で、そのまま政治に直結している。芸術至上主義の対極に位置する。

【54】正三位の主人公「兵衛の大君のころ高さ」への評価も、紫上を筆頭とする源氏物語の登場人物の心に通じる。明石姫君のこれからの暗示にもなっている。こうみてくると、『竹取物語』『宇津保物語』『伊勢物語』『正三位』といった、ここで取り上げた作品は、いずれもその作品を論ずるといったところより、源氏物語の目指す物語精神を補強する道具だとして機能していることが理解される。この小さな物語論は、いずれ巨大な物語論へと発展することはいうまでもない。(蜚巻)。

【55】時は村上天皇の頃。しかも天覧ということになれば、詳

細な記録の残っている『天徳内裏歌合』のことを想像するのが自然である。この絵合も、天徳内裏歌合を十分に意識した構成とみてとれる。

【56】天覧絵合は、光源氏の提唱によって実現したものである。彼は中宮御前の絵合の時点で、このことはすでに折り込み済みで、須磨・明石二巻の絵は天覧絵合のために残しておいた。ということとは、この本邦初得天覧絵合は、にわかに光源氏の政治ショーの意味あいを強める。彼は、全貴族の参加する場面で、須磨・明石の意味するところのものの確認を求めようとしているのである。世に従う心を使つた者たちへ、である。

【57】「延喜の御手づから」と、醍醐天皇の名前をここで出している。桐壺帝と醍醐天皇のイメージを切り離しかかっていると考えべきか。源氏物語の歴史離れである。絵合巻があまりにも、『天徳内裏歌合』という歴史そのままなので、こうしておかぬと物語にならないという事情もあるのだろう。つづいて朱雀帝が「またわが世のこと」と続けると、源氏物語の中の朱雀帝と、歴史上の朱雀帝がだぶってくる。朱雀帝は醍醐帝の子である。ふたりの間に、醍醐帝の子・村上天皇の時代がある。この伝でゆくと、桐壺帝は村上天皇ということになる。なんともまぎらわしい朱雀院である。

【58】梅壺女御に絵を贈る朱雀院。年中行事絵に醍醐天皇が言葉を添えたもの。さらには、斎宮との別れの大極殿の場。これををわざわざ「公茂」に描かせた朱雀院のこだわり。光源氏の須磨・明石は、朱雀院の大極殿なのである。この、対照関係も

よく把握しておく必要がある。朱雀院もなかなか頑張っているのである。

【59】朱雀院と梅壺女御の贈答は、二人が相思相愛の間柄であったことを露骨に示している。「身こそかくしめの外なれそのかみの心のうちを忘れしもせず」という朱雀院の、大極殿別れの場面に添えた歌は素直で簡明、心がきちんと乗った歌である。「むかし御釵の端をいささか折」って返歌した斎宮女御の行為は、リップサービス域を越えている。前に長恨歌にふれたことが、ここで生きる。【34】。二人が結婚できなかったのは「過ぎにしかたの御報いにやありけむ」と作者は総括する。光源氏の、自分を須磨・明石に追いやった朱雀院に対する報復というわけである。【11】。この発想は、天覧絵合の最後に劇的に表現されるところとなる。

【60】先に伊勢物語が引用されているから、朱雀院は業平、梅壺女御は斎宮のイメージに重なる。あるいは梅壺女御は二条后。禁断の恋のイメージである。これは、この巻の主役、光源氏と藤壺の飾りになっていると思う。

【61】弘徽殿太后から弘徽殿女御へ。血脈の繋がりに着目。藤原氏である。今の弘徽殿女御は昔の弘徽殿女御（太后）の姪である。同じく弘徽殿太后の妹で弘徽殿女御の叔母「尚侍の君」つまり臘月夜も、弘徽殿方に肩入れしている。この臘月夜の態度は、現在の光源氏が過去の光源氏と変わってしまっているという暗示であるかもしれない。（濡標巻）。

【62】天覧の絵合の場面は、藤壺中宮御前の絵合に比べて具体

性に乏しい。『天徳内裏歌合』に準じて理解せよ、ということか。

【63】光源氏の巧妙な推薦によって帥宮が、この絵合巻で、判者として登場する。いよいよ歌合の趣である。帥宮は権中納言とともに、上流貴族のなかにあって、悲遇時代の光源氏を支えた数少ない人物であった。（須磨）。こう悲遇時代の役者が揃うと、光源氏の政治ショーはなにやら「やらせ」めいてくる。

【64】「例の四季の絵」。月次の絵と同じ発想か。【32】。四季の絵は、しかし、龍宮にあるという四季の部屋発想で、これを置けば、座が龍宮感覚となるというものと考えられる。とすれば、この四季の絵は、最後に提示される須磨・明石の絵の前座となることが分かう。

【65】「紙絵は限りありて」。やはり物語絵は、版が小さく屏風絵のような迫力には乏しい。「山水のゆたかなる心」を見尽くすことは到底できない。物語の内容と両々相俟って鑑賞の実をあげるものである。そういう見解が「ただ筆の飾り、人の心に作りたてられて」の部分で表現されていると考えたい。

【66】天覧絵合には、藤壺も参加している。この時の呼称も「中宮」である。過去は完全に復活し、彼女は権力の頂点にいるのである。

【67】光源氏が判者に時折アドバイスを送る図。彼の役どころは、天徳内裏歌合における源高明である。帥宮はさしずめ判者をつとめた藤原実頼であろう。

【68】須磨の絵を最後の最後に提出し、接戦に決着をつけた光

源氏。予定の行動で、しかも予想通りの結果を得る。この絵合の企画および演出は、完全に光源氏の手の中にある。(56)。

須磨の具体的な映像をもちだし、全貴族に光源氏体験をさせる。帝は当然として権中納言、帥宮、そして藤壺以外の貴族たち、なかならず後涼殿に控える「殿上人」は、いずれも皆、今やまさしく転向者であるのだから、須磨は彼らにとって死んでも触れられたくない過去の傷である。それを、一番派手な場所を持ち込み、全員に突きつけた光源氏のこの行為は、政治的效果抜群であったと思われる。源氏物語の踏み絵。「須磨、忘るべからず」。光源氏は心の底で、転向者を決して許してはいないのだ。朱雀院への態度はその象徴だ。と、参加者はもちろん、読者をも震え上がらせる効果が、この行為にはある。

【69】こうも考えられる。須磨・明石という光源氏の屈辱は、この巻で天下晴れた世界に持ち出され、絶賛された、追隨を許さぬ絵に昇華されることによって、本来持っていた屈辱感が雲散霧消してしまう。かくして、須磨・明石は光源氏の物語に組み込まれ、名誉の負傷となる。作者の仕事は、おそらくこの方向に向かった仕事であったと想像される。

【70】現実より絵の方が感動を呼ぶ。源氏物語そのものが持つ虚構の意味は、この巻の「須磨の巻」の感動によって充分に表現されているというべきである。なお、この「須磨の巻」は源氏物語の物語絵なのであるから、劇中劇の発想でいえば、物語中物語ということになる。おもしろい設定である。

【71】光源氏と帥宮との「夜明け方」の会話、そして権中納言

をまじえた台奏。須磨・明石の仇討ちを果たし溜飲を下げた勝利者の宴である。光源氏が、当日の敗北者・権中納言をこの中に入れて見逃してはいけないポイントである。帝も藤壺もいる。この日の絵合の勝負は、彼らの「やらせ」にかぎりなく近い。(63)。

【72】それにしても、「昔の御物語」をするに足るほど、光源氏は幾つかの峠を越えてきたわけであり、今、一つの峰に立ち、来し方を振り返っている。青春時代は、遠のいた印象が深い。【73】才学が「いとう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるは、いとかたきものになむ」という記述。これからの源氏物語は、その困難を実現するのだという予告とも読める。この時、挫折の人・菅原道真や源高明の風姿が読者の脳裏をとらえよう。彼らが挫折しなかったら、これから展開する光源氏の政治を実現したはずだ。ということか。

【74】「おぼえぬ山がつになりて、四方の海の深き心あ見しに」と光源氏は須磨明石体験を言う。「深き心」のあたり、竜宮伝説や皇室起源説などを思い浮かべて理解する必要がある。明石姫君の登場の必然性を作者は言っているのだと思われるから。【75】帥宮が言う。「筆取る道と碁打つことぞ、あやう魂のほど見ゆる」。絵と碁の世界は、努力のみではいかんともしがたい、神の宿る才能の世界なのだ。と紫式部は言っているのである。

【76】光源氏は琴(きん)の名手。光源氏の「一の才」とまで帥宮は言っている。注目したい発言である。

【77】帥宮の証言によれば、学問は論外として、光源氏の才芸は、琴（きん）の次は横笛、琵琶、箏の琴の順に上手で「絵はなほふでついにてすさびさせたまふあだごと」だと思っていたという。今日彼は、この順序を変更したのかもしいないが、読者にとっては、絵以外にあげた光源氏の芸の物凄さがよく分かる記述である。帥宮の言葉によれば、桐壺帝からの学芸伝授は、光源氏によって瓶に水をうつすようになされたことが推量される。光源氏こそ、桐壺帝の正統な後継者なのだということを、さりげなく示した条であろう。この時、朱雀院は排除の人である。この時、光源氏の天皇の父である正統性が発生するといふべきか。

【78】光源氏、帥宮、権中納言らが、この宴で「酔ひ泣きにや、院の御こと聞こえ出でて、皆しはたれ」た、とある。復活の宴、という印象を見せつける記述である。桐壺院よ、ご照覧あれ。彼らの感激は推して知るべしであろう。

【79】「めでたき朝ぼらけ」の音楽の宴。和琴は、名手である権中納言。箏の琴は帥宮。光源氏は得意の琴（きん）。琵琶は少将の命婦。音楽に堪能な殿上人に拍子。光源氏はこの時、得意の絶頂にある。禄は藤壺の担当であった。絵に描いたような勝利者たちの宴である。

【80】「二十日あまりの月さし出でて」とある。天覧絵合の時は、三月二十日過ぎ。『天徳内裏歌合』の場合、三月三十日。時もほぼ一緒である。まへの、中宮御前の絵合は「弥生の十日」。十日の間を置いて、豪華な絵合が二度釣瓶打ちに行われたこと

になる。

【81】須磨・明石の絵巻は、中宮に与えたという記事。光源氏と藤壺との愛の完成、そして終わりであろう。

【82】絵をもらった藤壺は、「これが初め、また残りの巻々をゆかしがせたま」うたとある。須磨・明石の前後の巻々とは、源氏物語のことである。源氏物語は制作当初から絵巻化されていたのかもしれない。あるいはまた、須磨の絵が、源氏物語の構想の核になったのではないかと、とも想像される。須磨巻から書き始めたという伝説は、こう見直すべきかもしれない。

【83】源氏物語絵巻をここで強調したということは、以後の展開を、絵巻的興味をもって鑑賞してもらいたいという、作者のサインでもあろう。六条院物語の、これは予告である。

【84】権中納言の不安。光源氏にこのまま圧倒されるのではない。源氏物語における藤原氏屈辱の歴史は、ここに始まる。

【85】「さるべき節会どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむとおぼし、私さまのかかるはかなき御遊びも、めづらしき筋にせさせたまひて」とあるが、この絵合も、その具体例である。

【86】光源氏の出家意識。山里に御堂を造るまでに具体化していることが巻末に記されている。これは、嵯峨の御堂のことかと推測される。「昔のためしを見聞くにも、齢足らで官位高くのぼり、世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわざなり」という意識は、【73】の発展である。一方で、「末の君達、思ふさまにかしづき出だして見むとおぼしめすにぞ、疾く捨てたまはむこと

はかたげなる」という現実のブレーキも書く。作者は「いかにおぼしおきつるにかと、いと知りがたし」と例によって投げ出す。が、読者の脳裏には、近い将来展開される六条院絵巻が広がるにちがいない。【83】。出家意識と現世意識との整合・和解の源氏物語絵巻である。

【87】しかし、光源氏には、幼い夕霧と生まれたばかりの明石姫君がいる。先は長い。しばらくは、この世の人でありつづけなければいけない。この世にありながら、あの世にいるのが六条院の意味だと考えるべきかもしれない。

【88】とはいえ、嵯峨野御堂つまり釈迦堂のイメージが読者に広がる意味は重いつわをええない。釈迦堂には、奄然将来の釈迦像があり、この釈迦像は三国伝来の由緒正しい釈迦像である。釈迦と寸分違わず生きていたという像を鳩摩羅焰が天竺から盗み出し逃走。背負い背負われて大雪山を越えて走った。鳩摩羅焰は亀茲国で命尽きたが、その国の王女とのあいだに出来た鳩摩羅什が父の意思を継いで中国にもたらした。『今昔物語』巻第六第五話にある有名な説話である。その像を勅許を得て模刻し、日本に持ち帰ったのが奄然である。これを安置したのが嵯峨野釈迦堂。宿木巻の薫の証言によれば、光源氏は、出家した晩年を此処で過ごした。これを、光源氏の釈迦化ととらえるのは如何。そう心得て読むと、光源氏の意味が納得出来るのではないかと思う。また、紫式部の時代に立って見ると、この釈迦像は今日の様な大伽藍に安置されることなく、嵯峨野の小さなお堂に置かれていたにすぎない。清涼寺が完成したのは

奄然死後のことである。ちなみに、同じ頃紫式部も死んでいる。ということとは、作者は、清涼寺が出来る前に、光源氏に清涼寺を建てさせていることになる。嵯峨野の釈迦像の意味を、作者が重んじていた証拠であると同時に、光源氏と釈迦のイメージをダブらせようという作者の秘かな意図をも感じるのは私だけだろうか。

松 風 巻

【1】東院が完成する。二条院別院である。花散里は、すでに西の対に引越している。「東の対は、明石の御方とおぼしおきてたり」とある。また「北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにても、あはれとおぼして行く末かけて契り頼めたまひし人々つどひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへる」とあるのは、末摘花や空蟬、あるいは筑紫五節のことなどを考えているのであろう。一種の収容施設といった趣だが、愛する人を一か所にあつめるという発想は、すでに六条院への道がひらいているということかもしれない。さて、この文脈からいって、花散里と明石御方とは同格の位置づけである。明石御方の重視が最初から打ち出されていることに注目しよう。

【2】東院を管理する「政所、家司」にも、注目される。鎌倉幕府の「政所」は、貴族のこれを発展させたものである。こういう源氏物語的ではない経済的日常的側面の強調も、この時期の光源氏の栄華の基盤を想像させる効果がある。

【3】この東院の構想時に、六条院の構想はなかったのであらうか。「寝殿は塞げたまはず、時々わたりたまふ御住み所にし」というところを見ると、本拠はあくまで二条院で、東院はその別院、別所の発想である。六条院と東院との違いは、末摘花や空蟬たちがいないという点。紫上と秋好中宮が存在するという点である。東院から六条院へと展開する構想の推移、その原因を追究すべきであろう。

【4】「身のほど」意識は、明石御方のテーマである。この意識は、濡標巻、住吉社頭での解返以来さらに強まっていることが想像される。彼女は、自己を知り、人生を考える空蟬型の代表といえよう。彼女の当面の思考は、自分の生んだ姫君にしばらくする。「この若君の御面伏に」なる「数ならぬ身のほど」という強烈な自己意識。どうすれば姫君は幸せになれるのか。東宮のために身を殺した藤壺の人生は、いまや明石御方の人生に取って変わられていることに注意しよう。絵合巻の次にこの巻が置かれる心理的必然性はここにある。

【5】「こよなくやむごとなき際の人々に、なかなかさてかけ離れぬ御ありさま」は、花散里などのことをいっているのである。蓬生巻で展開された末摘花の事例は極端であったが、それと平行し背景となって展開されていた花散里の悲哀。そのことをここで読者に思い起こさせる。でもって、明石御方の苦悩の心理形成の説得力を増そうというのが作者の意図だと読める。

【6】「母君の御祖父、中務の宮」という事実がここで初めて明らかにされる。「母君」は、普通明石尼君のことだと考えるの

だが、明石御方を指すと考えると面白い。前に「若君」とあるから、文脈上、そう考えることもできなくはない。とすると明石御方の母、つまり明石尼君は中務卿の娘。王女であったことが判明する。また、「大井川のわたり」にあった宮の領地の券を所持しているという事実から、明石尼君は中務宮の正統な後継者であったと推察される。やんごとない血筋が、ここに強調される。明石御方は、そんなに卑下する必要はないのだと作者が応援している感覚といったらいいか。また、明石一族がその昔、京都から明石に去った後、この領地が預かりの私有地同然となつていふという事実からして、中務宮一族の衰亡のさまは歴然としている。「故民部の大輔」とあるのは一族の残存者であつたろうが、彼もすでに故人である。今は、中務宮一族は、京都では忘れ去られた一族。見る影もない状態といったところであろう。そこに、昔の亡霊同然にヌツと姿を現したというのが、預かりを筆頭に都の人々の、明石一族に対する正直な感想ではなかつたろうか。明石一族の復活物語は、世の人のレベルから見れば、だいたいこのような感じで受けとめられたと想像して間違ひなからう。

【7】中務宮、大井川という二つのキーワードから、醍醐天皇の皇子兼明親王を連想するのは自然である。政治を捨てた小倉山の文化人、隠遁者のイメージが広がる。これは明石入道のイメージと矛盾しない。

【8】宿守に言った言葉から、京を去った時の、明石入道的心境が分かる。「世の中を今はと思ひ果てて、かかる住ひに沈み

そめし。その昔、彼は、少し前の光源氏のように敗走し、自己の人生は諦めたのである。諦め土着したところが、光源氏と違っている。

【9】「宿守」「預り」、荒廃した院。このイメージは、夕顔の死んだ某院のイメージである。あの某院が、光源氏の母なる一族の本丸であるという想像をかつけたことがある。その本丸の復活こそが、六条院なのだという発想も、自然な流れだと思うがどうだろうか。(3)。

【10】何故、明石二行は、光源氏が用意した東院に行かず大井の旧宅に行ったのか。明石入道は次のように考えている。「にはかにまばゆき人の中いとはしたなく、田舎びにけるこちも静かなるまじくを、古き所尋ねてとなむ思い寄る」。入道は間を置いたのである。これは、入道の政治なのかもしれない。親王家にいう間を置くことによって、明石一行の価値を上昇させる。いな、再認識させる。これが、入道の密やかな戦略ではなかったか。光源氏は、これを了解し、六条院を造った。と考えるべきではないか。

【11】預りの言葉より、大井のすぐ近くに、光源氏が現在「御堂」をはなばなく造営していることが分かる。絵合巻末からの連続性が認められよう。入道の決断のなかに、ここに娘がいれば光源氏と逢える機会が多いという計算もあったものと思われる。

【12】中務宮のイメージは、醍醐天皇の御子・兼明親王。(7)。モデルはそうかもしれないが、明石御方の一世代前の人という

設定だから、恐らく作者はそう考えてもらいたくないのかもしれない。絵合巻の発想からすれば、醍醐天皇の御子・村上天皇の時代。つまり兼明親王の時代が現代だという設定なのだから。【13】しかし、「故民部の大輔の君」といつているところ。兼明親王の王子、伊行が民部大輔であったと『花鳥余情』は記す。が、『本朝皇胤紹運録』には見えない。調査すべき事項である。もし、これが本当なら、作者の兼明親王意識は、相当のものであるということになる。やんごとなき血筋の強調である。明石一族の上方修正である。(10)。

【14】この故民部大輔であるが、明石一族が都落ちをした後、都に残った僅かな勢力の頂点にいた橋頭堡的人物という設定であろうか。(5)。源氏物語本文に沿って考えると、末摘花巻で活躍した大輔の命婦の父「わかむどほりの兵部の大輔」などを思い出そう。「わかむどほり」の雰囲気作りという意図かもしれない。このあたりで、末摘花の父・常陸宮も、ゆっくりと意味をもたされて立ち上がってくる印象が強い。

【15】明石尼君が源氏。明石入道も光源氏の母・更衣の従兄妹。やはりこの物語は源氏一族復活の物語なのだ、とこのあたりで作者は言おうとしているような気がする。

【16】預りの描写が面白い。「鬚がちにつなしにくき顔を、鼻などち赤めつつはちぶき言」う。憎たらしい庶民の姿である。貴族に言いたいことをずけけ言う世の中の有り様を示していないか。こういう手合いが多かったものと推察される。こういう連中には「大殿のけはいをかく」る以外効き目がない。絵合

巻で、全貴族を震え上がらせた光源氏である。こんな預かりごとき何だという文脈だろう。しかし、彼らを屈伏させる人物が光源氏レベルに限定されてきているところに時代の流れを見て取れよう。貴族の基盤は、もはや修復が効かぬ程度になっていくのではないか。その思いが紫式部に源氏物語を書かせたのではないか。

【17】お前の作っている田などはそのまま作ればよい。という入道の台詞から判断して、大堰山荘は相当の土地を占めていたことが想像される。

【18】明石姫君の欠点は卑しい出自。衆目の一致するところである。明石入道が、中務宮の大井邸を造営復活し、明石一族の京都基地としたのは、その欠点への彼の反撃と読めよう。

【19】明石一族は決して卑しい一族ではない。もう知る人は少なくなったかもしれないが、知る人ぞ知る名門なのだという主張・自負である。光源氏が用意して待った東院にダイレクトに入らず、一旦大井に落ち着いたのは、明石一族のプライドであろう。光源氏はそういう入道の遣り方を「くちをしからぬ心の用意」と評している。以心伝心。姫君の重要性を認識し、その将来に確信をもっているのは、明石入道と光源氏のみである。光源氏は、入道の意思の詳細は知らぬだろうが、アウトラインくらいは理解しているものと思われる。

【19】惟光の報告によれば、大井の地は、「海づらに通ひたる所」。明石一族は龍宮からやって来た人のイメージがある。で、こういう細部が重要なのだ。

【20】光源氏が造営した嵯峨の「御堂」は、大覚寺の南にあった。というのだから、これは、清涼寺釈迦堂のことだと思わぬ人はまずないだろう。ここで、光源氏に源融のイメージが重なってゆく。ますますもって「源氏」物語である。「滝殿の心ばへ」とあれば、誰でも公任の「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえける」の歌を思い出す。これは、源氏物語を実際に読んでいる者に、すでになくなった世界を今見ているのだという感想をもたらずだろう。さらに言えば、融のイメージこそ六条院のイメージである。東院から六条院への転換は、融を媒介にして行われ、この物語は源氏の物語なのだという宣言になっていくと思う。後の六条院は、その位置その規模からして融の河原院の面影そのままである。ならば、池は海だ。これは「都の龍宮」と読める。六条院は明石一族を迎えるに、実に相応しい施設である。【3】。

【21】明石御方と尼君、そして姫君の上京は、秋。光源氏の復帰の時と同じ季節が選ばれている。

【22】「親たちも、かかる御迎へにて上る幸ひは、年ごろ寝ても覚めても願ひわたりし心ざしのかなふと、いとうれしけれど」とある。入道と妻の明石下向以来の思いがさりげなく記されている。入道はこの思いを片時も忘れることは無かったが、妻の方は、現実と妥協した。このことについてはすでに述べた。

【23】「あり果てぬ命を限りに思ひて、契り過ぎし来つるを、にはかに行き離れなむ心細し」。明石尼君は、その昔、人生を諦めてここにやって来た。何も知らぬ彼女が「捨てし世」であ

る都に帰り、何もかも知っている入道が明石に残る。皮肉な夫婦の別れである。「もろともに都は出できこのたびやひとり野中の道にまどはむ」。明石尼君の、素直ないい歌である。若いころ、可愛い人であったのではないかと想像される。

【24】明石尼君のことが「母君」と書かれている。【6】で想像した母君・明石御方説は無理がある。明石尼君は中務宮の孫と考えられる。やんごとない血筋は、いかにも遠い。紫式部における堤中納言兼輔感覚といったら分かりやすいか。明石一族は、それ相当の努力をしないと、血筋の強調には無理がある。したがって、是非にも大井別邸に住んでみせねばならなかったと考へたい。

【25】明石入道が明石姫君のことを「夜光りけむ玉」と表現したのは面白い。夜光る玉は、龍宮にある秘宝中の秘宝だということを知ってこころを読むと、明石入道の世界が神仙の世界のイメージとなることが分かる。この操作は、明石のイメージアップ作戦の一環であろう。この時、明石姫君の育ちの悪さなど吹っ飛んでしまう。彼女は龍宮という神仙界から来た異界の人で、不可能を可能にする存在なのだ。なお、夜光る玉については、例えば、『唐宋伝奇集』にある「柳毅伝」などを参照すると理解が容易になろう。この、「柳毅伝」は、すでに述べたように、源氏物語の構造にきわめて大きな影響を及ぼしている作品である。

【26】なお、明石と玉との関係について述べれば、『日本書紀』允恭天皇14年秋の条に明石の海から靈験あらたかな真珠を得た

話がある。明石の構想の核として、この話が作者の胸中にあつたのではないかと推察するが、どうであろうか。

【27】明石の女のことを「御方」と書いてある。この段階で、彼女の地位は格段に上がっている。

【28】明石御方との別れに際し、明石入道が言った言葉は、ほとんど我々にとっては既知のものだが、一つ注目すべきものがある。入道が中将という地位を捨ててまで、明石に下り自ら望んで受領となったのは、生まれた明石御方に何不自由のない生活をさせてやりたかったためであるということである。これはどういうことなのであろうか。明石御方の出生当時すでに明石一族の経済は相当に逼迫していて、受領を経験せねば持ち直せないほどになっていたというのであろうか。父大臣ももうこの世の人ではなかったとみえる。桐壺更衣の父大納言と同じ頃の死亡であったと考えられる。入道は、明石御方が将来「世を照らしたまふ光」となる人物であることを確信しているのだから、そのためには経済力をつけておかねばならぬと焦ったのかもしれない。何もせず座して死を待ち、するずると零落していった常陸宮家の者たちと、敢然と行動に出た明石入道。両家はその意味では対照的である。なお、経済至上主義とも見える明石入道の行為は、関屋巻の常陸介の行為とも微妙に響き合っている点も注目点であろう。彼も、空蟬に何不自由させたくなくて、世に従う心をつかったということ、すでに見てきた通りである。

【29】いまさら都に帰っても「古受領の沈めるたぐひ」で、貧しい家を元通りにすることもできず「公私にをこがましき名を

広め」るのがおちだ。「親の御なき影をはづかしめむことのいみじさ」という明石入道の意識は末摘花に同じである。(蓬生巻)。明石一族の過去の栄光も常陸宮に優るとも劣ることなど決してないものであったと想像される。

【30】この明石入道の言葉の中にある「貧しき家の蓬葎」こそ、例の某院なのではないかと私は想像するのであるが、どうだろうか。ここと、隣の六条御息所の家をとりこんで六条院とする。六条院は、明石一族のために、中宮となる女性の里の家として光源氏が用意せねばならなかった、一族復興の中核となる施設なのではないのか。【3】【9】。光源氏の六条院造宮、一族復興は、明石入道の見果てぬ夢の継承なのである。光源氏は、それを自覚的に行っていると考えるべきである。

【31】「御宿世のたのもしさ」「契り異」「君達は世を照らしたまふべき光るければ」といった入道の言葉を聞くにつけ、若菜巻まで読んでいる読者には、彼の見た夢の話を語りたくてうずうずしている入道の心理が痛いほど理解されよう。夢は語れば破れる。入道は、夢語りの寸前で耐え、夢を滲ませるのみ。

【32】明石入道の言葉、「天に生まるる人のあやしき三つの途に帰る」は天人五衰のことである。こういう発想を持ち出していること自体、神仙思想の一環として了解すべきであろう。入道の悲しみは、今、天人が地獄に落ちる悲しみに相当するということである。

【33】京都のことを、「捨てし世」「そむきしかた」と言う。明石入道と尼君。強い意思の伺われる表現である。

【34】入道の執念。「煙とならむ夕まで、若君の御ことをなむ、六時のつとめにもなほ心ぎたなくうちまぜはべりぬべき」。この世への執着心は、すざまじい。北山僧都も、このように紫上のために、今も祈っているのであろうか。明石入道と北山僧都を対にして考えると、源氏物語の構造がよく分かると思う。

【35】明石から京都への道中。辰の時、つまり朝八時ごろの出発。「思ふかたの風にて、限りける日違へず入りたまひぬ」。なんだか船に乗り一日で着いた感覚であるが、「限りける日」つまり予定の日に着した。実際は数日かかっていることが分かる。日常的な時間が回復している実感を抱かないか。疾風怒濤の過去がなにより懐かしくもある。

【36】この巻は、明石尼君にかなり焦点があっていると。「かの岸に心寄りにしまま船のそむきしかたに漕ぎ帰るかな」も、彼女の人生を要約しているいい歌である。

【37】帰京し、大井の家におちついた尼君の感慨。特に、光源氏が明石をたちさる時に残していた「かたみの琴(きん)」を明石御方が奏でた時、「聞きしに似たる松風」と詠んだ歌。

明石尼君が「思ひ出」している「昔のこと」とは、彼女が物心がついてから明石入道と結婚するに至るまでの、この大井の館で展開された一族の黄金時代であることは間違いないだろう。入道の父・大臣がいて、祖父の中務卿も健在であった黄金の日々の記憶。琴(きん)が一時代前の楽器であることが、この場合、小道具としてよく効いている。「身をかへてひとり帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く」。「聞きしに似たる松風」が、こ

の巻のメインテーマである。

【38】光源氏は、紫上に遠慮して、なかなか大井にやってこなかったらしい。「とかうおぼしたばかりのほどに日ごろ経ぬ」。これは、明石御方の「身の程」意識を相当に刺激したはずである。

【39】光源氏が大井訪問に際して、「二三日ははべりなむ」と紫上に断った時、紫上が言った台詞。「斧の柄さへあらためたまはむほどや、待ち遠に」は第一級の、人を殺す寸鉄である。こう言われたら、いかな光源氏も長居はできなからう。さて、この言葉、偶然だが、明石の神仙イメージと響きあい、それを補強する働きがある。桂院の桂も月に生える木で、神仙感覚の補強となっている。

【40】斧の柄の朽ちる話は、いわゆる「爛柯」の故事のこと。

『述異記』にある王質の話に基づく。今、古典大系の山岸徳平の補注を参考までに引用しておく。「述異記に、晋の時代に、信安郡の石室の中に、二人の童子が碁を打って居た。王質と呼ばれる樵が、それを見物して居ると、童子は棗(なつめ)の種子の様な、小さい物をつくれた。王質がそれを食べたなら、一向に空腹を感じなくなった。よい気になり、樵に使う斧を、側に置いて、じっと見物して居た。やがて、童子が「お前の斧の柄はすっかり朽ちたぞ」と言った。それから、王質は郷里に帰ったが、もう知人は一人も居なかった。居る人はすべて、王質の知友の七世の孫どもばかりであった、とある」。また、この故事は『水経』の「浙江水」の注に「東陽記」を引用した箇所にもある。内容はほぼ一緒だが、こちらでは、王質が見物したの

は碁ではなく、琴を弾き歌をうたう童子四人の音楽である。文脈からいって、紫式部は、『水経』の方を引用して、紫上の言葉に、光源氏と明石御方の琴の合奏で時を忘れるイメージを乗せたのかと思われる。

【41】『枕草子』七十四段に、主人の長居を供人が嘆く場面で、彼らがひそかに「斧の柄も朽ちぬべきなり」と言う場面がある。これより察するに、「斧の柄が朽ちる」という発想は、人口に膾炙したものであったと知れる。古今集や拾遺集にも、見える。引用すると、

筑紫に侍りける時に、まかり通ひつつ、碁打ちける人のもとに、京に帰りまうでて、遣はしける

紀友則

ふる里は見しこともあらず斧の柄のくちし所ぞ恋しかりける

(古今集卷第十八雑歌下)

題知らず

よみ人知らず

なげ木こる人入る山の斧の柄のほとしくもなりにける哉

(拾遺集卷第十四恋四)

【42】「桂の院」も、最近にわかに光源氏は造ったらしい。嵯峨野の院。二条院。東院。これに桂院を加えて、光源氏の邸宅は、現在四箇所あることになる。紫上は、明石が嵯峨野に出てきているという光源氏からの話を聞いて、この桂院を明石用のものと理解している。紫上の機嫌は悪い。明石のただならぬことを、彼女は本能的に知っているのである。

【43】明石姫君を見た光源氏の感想、夕霧の可愛さなど目ではない。「すぐれたる人の山口はしるかりけれ」。この表現も面白い。これからすると、山口県という名称もなかなか含蓄がある。日本の入口。やまとぐち。

【44】乳母の描写。「下りしほどはおとろへたりし容貌ねびまさりて」もよい。彼女が明石の側にいて、立派にその役目を果たし、地歩を固めていることがよく伺えよう。

【45】光源氏が桂院にやってくるという情報に、「近き御荘の人々」が湧き出るようにやってきて、大井と知るや、そちらに押し寄せる。大井の館の手入れが急速に進む。蓬生巻で経験ずみのものだが、こういう記述で、現在の光源氏の権勢がよく表現されている。(2)。

【46】光源氏が「東の渡殿の下より出づる水の心ばへ、つくろはせたまふ」というわけで、うちとけた「なまめかしき桂姿」をしているという表現。庭師のようなことを光源氏がやっているのかもしれない。珍しい表現だが、光源氏の嬉しさが素直に表現されているものと見たい。

【47】わざわざ直衣に着替えて来た光源氏。尼君への表敬である。尼君の言葉。「捨てはべりにし世を今さらにたち帰り、思ひたまへ乱るる」。彼女の若い日の経験が、「捨てはべりにし世」に滲んでいる。彼女は、何も知らぬ王孫なのではない。女の政治をよく心得た女なのである。

【48】尼君が光源氏に言った言葉も、女の政治という文脈で理解すべき事柄である。「荒磯陰に心苦しう思ひきこえさせはべ

りし二葉の松も、今はたのもしき生い先と祝いきこえさるを、浅き根ざしゆゑやいかかと、かたがた心尽くされはべる」は、明石姫君の現状を簡潔に整理し、問題点を正確に認識している。この認識は、光源氏および明石御方、明石入道の共通のものであるから、これから起こる姫君の移行という問題は案外簡単に運ぶものと予想される。後は人情がらみの話が残るだけであるが、この人情、そう簡単なものではない。作者がどう処理してゆくか。けだし見ものである。

【49】光源氏は尼君に、「親王の住みたまひけるありさま」を語る。彼が中務卿の時代を目撃していたはずはないから、知識として知っている範囲の話であつたと思われる。しかし、この話を光源氏がわざわざ持ち出したということは、劣等意識の拭えない尼君および明石一族への激励となつている。自分の口からは言えないが言ってもらいたいことを光源氏に言ってもらえた尼君の嬉しさは容易に想像されよう。中務卿の時代に話をもつていけば、光源氏と明石一族は同族意識を持てるわけで、明石の地で入道から知らされた事実の一端を光源氏は今語り、尼君を安心させているのである。光源氏の優しい気配りであろう。

【50】光源氏と尼君との贈答に見る「清水」「いささる」は、この大井の館を兼明親王の、嵯峨山荘のイメージにしている。天延三年八月、親王は龜山の神に祈請し靈泉を得ることに成功しているからだ。(『日本紀略』、『本朝文粹』『龜山の神を祭る文』)。ならば、光源氏自らが、庭師のような格好をして、渡殿の下の水の手入れをしていた意味の重大さが、認められよう。

「つくるはれたる水の音なひ、かことがましう聞こゆ」。遣り水も喜んでいるようではないか。

【51】光源氏が嵯峨の御堂に渡り、そこで営む予定の「普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏」を指示する。という記述は、いよいよもって、「御寺」が清涼寺・釈迦堂のことを示唆しているものと知れる。この巻の光源氏は、あきらかに源融のイメージである。(20)。紫式部は、齋然が建てられなかった釈迦堂を、源氏物語のなかで光源氏に建てさせているのである。三国伝来の釈迦像の意味を、よく承知していたからではないかと推察される。

【52】二日目の夜。光源氏と明石御方との琴(きん)を介した贈答の場面。これは、明石巻の、二人の別れの名場面に接続するものである。(明石巻)。「かの琴の御琴さし出でたり」。これは、前巻において光源氏が須磨の絵を出した行為に匹敵するものだと思う。こうして、明石御方は光源氏と真の意味で結ばれたのである。

【53】明石姫君を二条院に引き取るという構想が光源氏の胸に宿る。「二条の院にわたして、心のゆく限りもてなさば、後のおぼえも罪まぬかなむかし」。これをなかなか言い出せぬ。光源氏がそれほど明石御方を愛しているからである。

【54】「宿世」の思想は宿報の思想である。釈迦在世中は、果に對する因は明示された。釈迦なき今、果でもって因を推察するほかない。かくて因果の因は切り離され、果が自立し、宿世の思想が成立したのである。現報の場合は違う。因がこの世にあるから、分かりやすい。源氏物語にもその例がある。女三宮事

件である。これは現報によって救われる例。後に述べよう。また、全体としての光源氏の運命は、この伝でゆけば宿世である。

【55】結果的に、この姫君を二条院ではなく、新しく造った「仏の御国」のような六条院に迎えるということになる。六条院は、神仙的人物が住むにふさわしい世界なのだという位置取りなのではないか。とすれば、二条院なんて、世の常の住まいということになるかもしれない。

【56】第三日目。大井から桂殿に移る。殿上人たちが大井にまで迎えに来る。光源氏は隠れ家を見つけれられて弱っているような素振りを見せている。こうして、徐々に明石御方を世間に知らしめてゆくというのが彼の戦略でもあろう。場所が中務卿の旧宅であるというのも、明石御方のイメージを高級なものとしたことと思われる。

【57】大井を去る光源氏に、姫君を抱いて出た乳母の言った言葉「はるかに思ひたまへ絶えたりつる年ごろよりも、今からの御もてなしのおぼつかなうはべらむは心尽くしに」は、適切なアドバイスであらう。この乳母はこれくらい光源氏に言える実力がある。明石御方の頼もしい味方である。光源氏から与えられた、いわば光源氏のシンパである乳母をこうさせたのも、明石御方の人柄であらう。明石御方も、この点で紫上に似ている。

【58】「若君、手をさし出でて」云々。紫式部は子供の描写が上手い。子育ての経験の故か。ほんらい子供好きなのであろう。

【59】光源氏との別れに「思ひ乱れて臥し」なかなか見送りにでてこない明石御方を見て、「あまり上柴めかし」と光源氏が

思っている。光源氏は葵上のことなどを思い出しているのかもしれない。葵上などに比べれば、明石御方は「下衆」なのである。こういう冷徹な描写が、姫君を紫上に差し出す処置を支持するのである。

【60】ちょっと太って、中年の貴祿が出てきた光源氏。青年期はすらりとした細身であったことが分かる。

【61】「かの解けたりし蔵人」今の「靱負の尉」の点描。「今年かうぶり得てけり」。彼の存在が、須磨・瀟標・閑屋の三巻とこの松風巻とを結合させる。彼は明石時代の恋人と再会している。小さなドラマ。ほどほどの恋の実例である。

【62】早朝から「露を分けて」お供に参上した頭中将や兵衛督は、光源氏の追従人。靱負の尉の後に書かれているので余計そんな気がする。

【63】予定を一日変更して、光源氏は桂院で遊宴をする。管弦の遊びに使用された楽器に注意したい。琵琶、和琴、そして笛。琴（きん）は使用されていない。琴（きん）は古代の楽器で「今めかし」いものではないのである。おそらく、この宴席に列した貴族たちの中に琴（きん）の上手はいなかったのだらう。若いメンバーならいかんともしがたい話であらう。

【64】「鶴飼ども召したる」とある。桂のあたりでの鶴飼も、宇治の鶴飼同様、昔からあったものと知れる。

【65】この私宴を知った帝が、勅使を差し向ける。光源氏の権勢、榮耀榮華が並大抵のものではないことを示している。彼の帝への返歌は、「小倉山峰のもみじば心あらばいまひとたびの

行幸またなむ」とやった藤原忠平と同工異曲である。忠平のイメージは長期安定政権。光源氏のイメージがこれに重なるわけである。草子地も言っている。「行幸待ちきこえたまふ心ばへなるべし」。

【66】帝の言葉「今日は六日の御物忌あくる日にて」。帚木巻雨夜品定めにあった「内裏の物忌み」と同じ物忌みであらうか。六日連続の物忌みであったらしい。

【67】メンバーのうち「すこしおとなびて、故院の御時にも、むつまじうつかうまつりなれし人」と紹介されている「左大弁」とは誰のことか。幼い光源氏を高麗の相人のもとに連れていった右大弁のことだろうか。彼が光源氏の「御後見だちてつかうまつる」男であったことは、桐壺巻で確認できる。彼のこのような気がする。

【68】「斧の柄も朽ち」という発想は二度目である。今度は光源氏の心中思惟。これを桂院遊宴の切上げに使っているのは、大井、桂の地が神仙境であるという含意だらう。それと同時に、やはり、光源氏の中に占める紫上の重さを示す意味がある。光源氏は、紫上の言葉の威力で二条院へ呼び戻されるのである。（40）。

【69】「今日さへはとて、急ぎ帰りたまふ」とある。三日目は桂院に泊まらずそのまま帰ったように見えるが、事実はそのではない。帰ってきて紫上に「今朝はいとなやまし」と光源氏が言っていることから分かるように、桂院にその日は泊まり、翌朝早く二条院に帰還したのである。光源氏の嵯峨野行きは三泊四日

の行程であった。

【70】二条院に帰ってきた光源氏に対する紫上の嫉妬ぶりも面白く描かれている。「なずらひならぬほどを、おぼしくらぶるも、わるきわざなり」と光源氏は言うが、本当だろうか。明石御方こそ生涯のライバルなのだということを、紫上はこの時すでに本能的に知っていたのではあるまいか。事実、光源氏は、二条院でちょっと休んで内裏に参上している。参上する寸暇を惜しんで明石御方に文を出している。これを「御達など憎みきこゆ」とあるから、この件は早速にも紫上に注進されたものと思像される。

【71】紫上の機嫌をとるために、光源氏は内裏に泊まらず二条院に帰ってくる。先程の文の返事を使いがもって帰っていた。その明石御方の手紙を紫上の前に投げ出し、見ようとしない紫上に「せめて見隠したまふ御まじりこそ、わずらはしけれ」と笑う光源氏。こういう男には、いかな紫上とて負けるだろう。

【72】この巻の最後は、光源氏が明石姫君を自分たちの許に引き取る相談を紫上とやる場面である。子供好きの紫上の心が動く。この場面、漆標巻巻軸の、斎宮の処置をめぐって額を寄せ合った光源氏と藤壺の場面にそっくりではないか。作者は、わざわざこういう場面を作ったにちがいない。可愛い紫上も、いつのまにやら戦略家光源氏に取り籠められて、彼と「同じ心にて思ひめぐら」す政治家の妻になってしまっているのである。

【73】「思わずにのみとりなしたまふ御心の隔てを、せめて見知らず、うらなくやはとてこそ」という紫上の台詞。一筋縄では

行かぬ光源氏にたいする対処法は、素直に振る舞わぬことだと言っている。紫上も可愛いばかりの女ではない。

【74】明石姫君の年齢「蛭の児が齡」で、三歳。思えば、光源氏は三歳で母を失った。姫君は、三歳で、新しい母に出会う。これも、作者の計算の内であろう。紫上の思い「児をわりならうたきものにしたまふ御心なれば、得て、抱きかしづかばやとおぼす」とあるから、明石姫君は、そのほうが幸せになるのではないか。読者を安心させる展開の予告である。

【75】蛭の子が三歳になるまで足が立たなかったので葦舟に乗せて流したという話は『日本書紀』の「一書」にある話であって、『古事記』にはない。紫式部は、『古事記』は見えていないのではないか。

【76】「蛭の児」の話をここで持ち出した意味は、もっと考えておかなければいけないかもしれない。古代神話。伊邪那岐、伊邪那美の国生み伝説に、われわれの思念を導くからである。両神がおりたったオノコロ島。最初は失敗。次に正しく生んだのが淡路島。明石のあたりから、日本は生成してゆく。このイメージが、明石姫君の登場のための前奏曲としていかされているのではないか。源氏物語は皇室起源物語の側面が強い。

【77】光源氏と明石御方との逢瀬は月に二度。光源氏の言った通り、今のところ明石御方は紫上の敵ではない。(63)。しかしながら、七夕や花散里に比較すれば、明石御方の扱いは破格である。

